

# 徳島市埋蔵文化財発掘調査概要10

2000. 3

徳島市教育委員会

# 徳島市埋蔵文化財発掘調査概要10

2000.3

徳島市教育委員会

## 序 文

大河・吉野川と眉山の豊かな緑に象徴されるまち・徳島市には、先人達が今に残す文化と伝統が数多くあります。中でも、過去の人々の暮らしや文化が大地に刻み込まれた証としての埋蔵文化財については、数々の貴重な発見がなされております。

近年の都市開発事業の波は、埋蔵文化財に対して大きな脅威であることも事実であります。しかし、発掘調査により明らかにされます数々の成果からは、かつて徳島の地に生活した先人達の心を読み取ることができ、これらを学び受け継ぐことは、21世紀に向けて歴史・文化・自然を生かした創造性の高いまちづくりに通ずるものと思われます。

本書は発掘調査の成果を一冊の報告書としてまとめたものですが、生涯学習および歴史教育、さらには学術研究の場に微力なりとも寄与することができれば、幸甚かと存じます。

最後になりましたが、発掘調査を実施するにあたり、多大な御理解と御協力を賜りました関係各位に深く感謝申し上げます。

平成12年3月31日

徳島市教育委員会

教育長 柏木 雅雄

## 例　　言

- 1 本書は平成6～11年度に徳島市内の埋蔵文化財包蔵地における諸開発事業に伴い実施した緊急発掘調査の内、2遺跡3件についての概要報告書である。
- 2 報告の対象となった遺跡名、調査場所、調査期間、調査地については抄録に記載した。
- 3 発掘調査は徳島市教育委員会が主体となり、本書に係る経費は徳島市教育委員会が負担した。
- 4 出土遺物、図面、写真の整理等報告書作成に関する作業において、下記の方々の御協力を得た。記して感謝したい。

佐伯俊裕 高木 淳 市川欣也 倉佐晃次 中野勝美 山口文子 折野絵美  
青木健司 吉田祐子 露口啓子 木下 尚 澤田一人

- 5 本書に収録した遺物および記録類は、すべて徳島市教育委員会社会教育課において収蔵・保管する。
- 6 本書の作成には調査担当者が分担して執筆し、目次にその文責を明らかにした。なお編集は勝浦康守が行った。



調査位置図（国土地理院発行1/50,000「徳島」「川島」縮尺使用）

I 矢野遺跡 II 矢野遺跡 III マンジワ塚2号墳

# 目 次

序文

例言

目次

本文目次

- |                            |              |      |
|----------------------------|--------------|------|
| I 矢野遺跡（水路改良工事） .....       | (三宅良明) ..... | (1)  |
| II 矢野遺跡（市道改良工事） .....      | (勝浦康守) ..... | (15) |
| III マンジョ塚2号墳（市道拡幅工事） ..... | (下田順一) ..... | (29) |

挿図図版

写真図版

## 挿図図版

### I 矢野遺跡（水路改良工事）

- 第1図 調査地位置図
- 第2図 掘出遺構配置図
- 第3図 壊穴住居跡SA01
- 第4図 壊穴住居跡SA01出土遺物
- 第5図 土壌SK01
- 第6図 土壌SK01出土遺物
- 第7図 土壌SK02
- 第8図 土壌SK02出土遺物
- 第9図 土壌SK03
- 第10図 土壌SK03出土遺物
- 第11図 土壌SK04
- 第12図 土壌SK04出土遺物(1)
- 第13図 土壌SK04出土遺物(2)
- 第14図 ピットP10
- 第15図 ピットP10出土遺物

### II 矢野遺跡（市道改良工事）

- 第1図 調査地位置図
- 第2図 調査地概略図・遺構配置図
- 第3図 土壌SK01出土遺物
- 第4図 土壌SK01出土遺物
- 第5図 土壌SK01出土遺物
- 第6図 土壌SK01出土遺物
- 第7図 土壌SK01出土遺物
- 第8図 土壌SK01出土遺物
- 第9図 土壌SK02出土遺物
- 第10図 溝SD01(44~46)、土壌SK02(47~52)  
出土遺物

### III マンジョ塚2号墳（市道拡幅工事）

- 第1図 調査地位置図
- 第2図 地形・墳丘断面図、トレンチ配置図
- 第3図 調査区断面図
- 第4図 調査区平面図(上)・埋葬施設平面図(下)
- 第5図 出土遺物

## 写真図版

### I 矢野遺跡（水路改良工事）

- 図版1 上：調査区全景(SA01検出前)  
下：調査区北半部

### II 矢野遺跡（市道改良工事）

- 図版2 上：壊穴住居跡SA01  
下：土壌SK01遺物出土状況
- 図版3 上：土壌SK02遺物出土状況  
下：土壌SK03遺物出土状況
- 図版4 上：土壌SK04遺物出土状況  
下：ピットP01遺物出土状況
- 図版5 上：ピットP10臺(68)ほか出土状況  
下：ピットP10臺(69)出土状況
- 図版6 壊穴住居跡SA01出土遺物
- 図版7 壊穴住居跡SA01(上・中)、ピットP01  
(下)出土遺物
- 図版8 土壌SK01(11、14)、SK02出土遺物
- 図版9 土壌SK03出土遺物
- 図版10 土壌SK04出土遺物(1)
- 図版11 土壌SK04出土遺物(2)
- 図版12 ピットP10出土遺物

### III マンジョ塚2号墳（市道拡幅工事）

- 図版1 上：調査地I区遺構検出状況  
下：調査地III区遺構検出状況
- 図版2 上：調査地I区土壌SK01遺物検出状況  
下：調査地I区土壌SK01遺物検出状況
- 図版3 上：調査地I区溝SD01遺物検出状況  
下：調査地I区溝SD01遺物検出状況
- 図版4 上：調査地III区土壌SK02遺物検出状況  
下：調査地III区土壌SK02遺物検出状況
- 図版5 土壌SK01出土遺物
- 図版6 土壌SK01出土遺物
- 図版7 土壌SK01出土遺物
- 図版8 土壌SK01出土遺物
- 図版9 土壌SK01出土遺物
- 図版10 土壌SK01出土遺物
- 図版11 溝SD01(44、46)、土壌SK02(51)出土遺物
- 図版12 土壌SK02出土遺物

### III マンジョ塚2号墳（市道拡幅工事）

- 図版1 上：調査地遠景  
下：岩盤検出状況
- 図版2 主体部埋葬施設蓋石の検出状況
- 図版3 出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	とくしまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいよう
書名	徳島市埋蔵文化財発掘調査概要
副書名	
卷次	10
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	三宅良明・勝浦康守・下田順一
編集機関	徳島市教育委員会
所在地	〒770-8571 徳島市幸町2丁目5番地 TEL 088-621-5418
発行年月日	西暦 2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村番号	北緯 度分秒	東經 度分秒	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
矢野	とくしまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいよう 徳島県徳島市 国府町	36201	- 34度 3分 37秒	- 134度 28分 27秒	19950214～ 19950307	350	水路改良 工事に伴う 事前調査
矢野	とくしまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいよう 徳島県徳島市 国府町	36201	- 34度 3分 40秒	- 134度 28分 23秒	19971001～ 19971031	200	市道改良 工事に伴う 事前調査
マンジョ塚 2号墳	とくしまいぞうぶんかざいはくつちょうさがいよう 徳島県徳島市 支六町・浜町	36201	- 34度 2分 40秒	- 134度 32分 38秒	19991116～ 20000128	30	市道拡幅 工事に伴う 事前調査

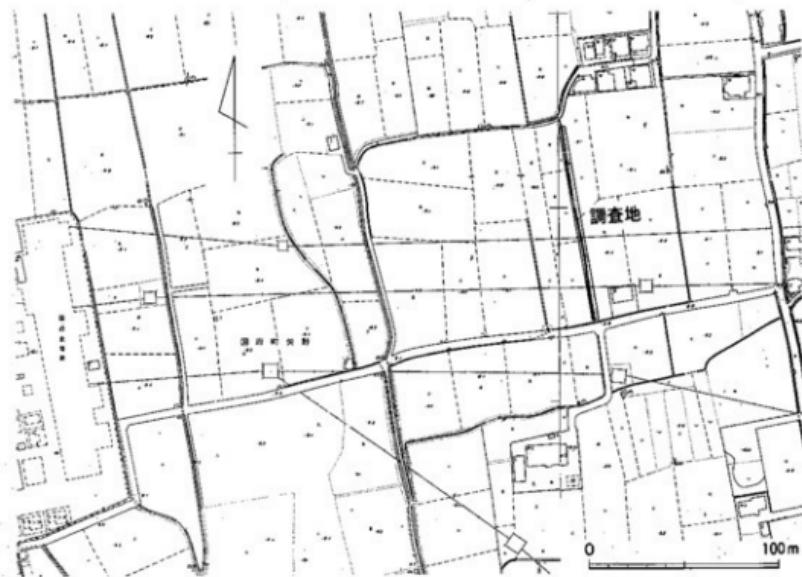
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
矢野	集落跡	弥生 中世	竪穴住居跡 土壤 ビット 溝	弥生土器	
矢野	集落跡	弥生	土壤 溝	弥生土器	
マンジョ塚 2号墳	古墳	古墳	竪穴式石室	土師器 蓋形埴輪 家形埴輪 円筒埴輪	

# I 矢野遺跡（水路改良工事）

## 1 調査に至る経緯

矢野遺跡は鮎喰川水系の旧河川によって形成された、標高T.P. + 9 m前後の沖積微高地上に立地する。1960年代に弥生土器の散布や遺物包含層の存在が確認され、遺跡としての重要性が認識されるようになった。1976年（昭和51）には四国電力国府変電所構内で県教委による第1次発掘調査が実施されたが、その後も変電所構内を中心に緊急発掘調査が行われ、変電所周辺に拡がる弥生時代中～後期を中心年代とした集落遺跡として周知されてきた。近年では、1992年（平成4）～1999年（平成11）にかけて、一般国道192号徳島南環状線建設に伴う広範囲な発掘調査が県埋文センターによって実施され、遺跡の上限が少なくとも縄文時代中期後半まで遡ることが明らかにされるとともに、銅鐸埋納壙や勾玉工房遺構、水銀朱の精製流通関連遺構等の検出事例に代表されるように、鮎喰川および吉野川下流域の拠点的集落としての矢野遺跡の性格が、より具現化されるまでに至っている。

今回概要報告を行う調査は水路改良工事に伴うもので、既存水路の影響も受け、遺構の依存状態は決して良好とは言えなかったが、約350m<sup>2</sup>を対象に実施し、中世～近・現代の溝、弥生時代



第I図 調査地位置図

の竪穴住居跡、土壌、ピット（時期不明含む）などを検出した。

## 2 調査の概要

調査地の現地表面は標高T.P.+9mを測る。基本層序は概ね、第1層：現水田耕作土（約20cm）、第2・3層：旧水田耕作土（約20~30cm）、第4層：黄褐色シルト層となっており、遺物包含層はほとんど残存せずに、第4層上面が遺構検出面となっている。ただし調査地には農業用水路（SD01）が既存し、水路底面が調査地ほぼ全域にわたって第4層まで達していた。このため、第4層上部ではグライ化が進行している部分や、砂層が薄く堆積している箇所も存在し、このことは、同層を検出面とする遺構埋土の変質をも余儀なくしているものと思われる。また遺構検出レベルにもT.P.+8.5m~7.8mと幅があり、水路による遺構面削平の影響が窺える。以下、主な検出遺構と出土遺物について概要を述べる。

### （1）溝（第2図、図版1）

調査区の中央を南北に走る既存現代水路（SD01）にはほぼ並走する5条以上の溝を確認した。

#### ① 溝SD02

オリーブ灰弱粘質土を埋土とする。底分に小規模な凹凸が顕在するため、溝の深さは5~30cmと著しく変化している。遺物・炭化物を少量含むが時期は不明である。

#### ② 溝SD03

溝SD02の東側を並走し、幅80cm、深さ14cmをとどめる。灰オリーブ弱粘砂質土を埋土とし、遺物・炭化物を少量含むが時期は不明である。

#### ③ 溝SD04

溝SD03の東側を並走し、幅60cm、深さ14cmをとどめ、灰オリーブ弱粘砂質土を埋土とする。遺物は出土しておらず時期は不明である。

#### ④ 溝SD05

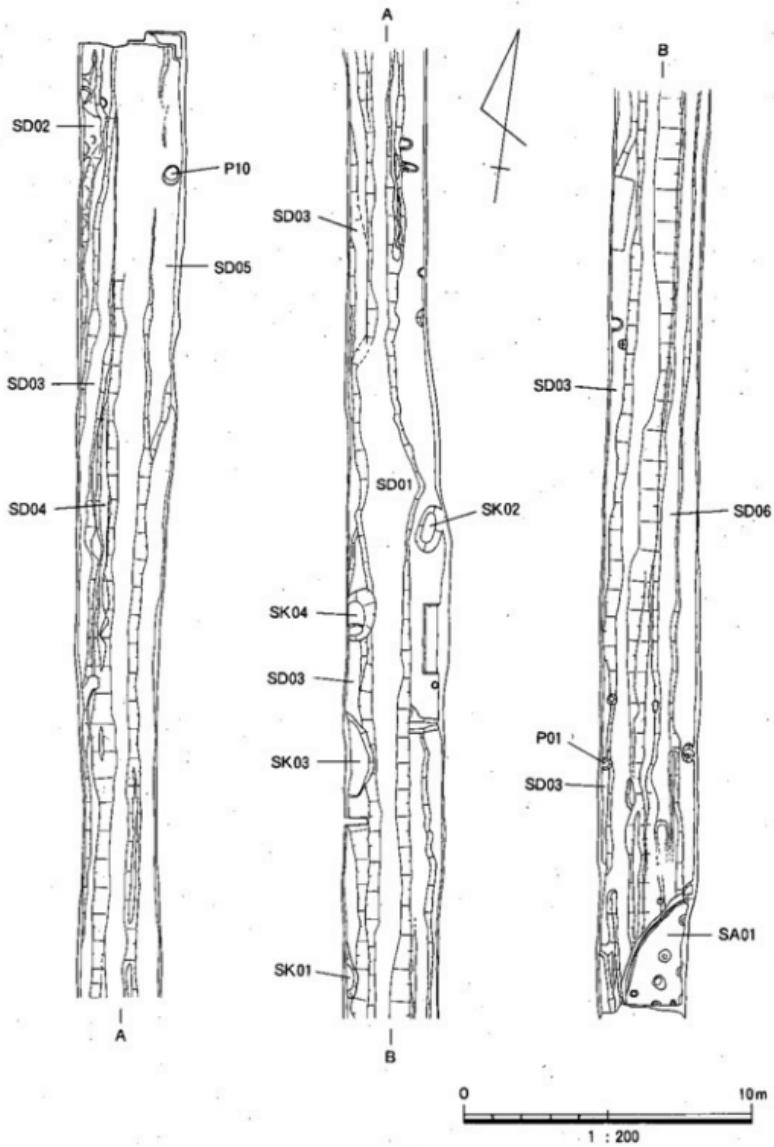
灰オリーブ弱粘砂質土を埋土とし深さ10cmをとどめる。幅は不明である。瓦器碗・土鍋の破片が出土しており、14世紀の年代が与えられる。

#### ⑤ 溝SD06

幅90cm、深さ5cmをとどめる。遺物は出土しておらず時期は不明である。

### （2）竪穴住居跡SA01（第3、4図、図版2、6、7）

調査地南端で住居跡の一角を検出した。図面上で正円形の住居を想定復元した場合、直径は15mを優に越え、これまで類例のない巨大住居跡となることから、不正円形あるいは方円形に近い住居を想定するのが妥当であろう。深さ約40cmを測り埋土は3層に大別される。壁構を巡らせて



第2図 検出遺構配置図

いる。甕(1~4)、鉢(5~10)、壺(図版7ー上・中)が出土しているが、いずれも破片に限定される。甕(1~3)は大きく外反させた口縁端部をやや先窄まり状に丸くおさめる。甕(4)は「く」字状に外反させた口縁端部を僅かにつまみ上げている。いずれも外面のハケはほとんど消滅している。鉢(5~7)は小型のもので、やや内傾気味に立ち上がった後、口縁部を緩やかに外反させ、端部は矩形におさめる。鉢(5)の内面にはハケ、鉢(7)の内面にはヘラケズリが認められる。鉢(8)はやや厚手で椀形を呈し、僅かに外反させた口縁部をそのまま先窄まりにおさめる。外面縦方向のハケ、内面にも一部横方向のハケの痕跡が認められる。鉢(8)は口縁部をほとんど水平方向に外反させ、端部は先窄まりにおさめる。外面は縦方向のハケ、内面には横方向のヘラケズリが施されている。鉢(10)は浅い椀形を呈し、口縁部はほぼ垂直に立ち上げ丸くおさめる。口縁部に穿孔がなされている。高杯の杯部の可能性もある。壺(図版7ー上・中)はいずれも胴部の破片で、櫛描直線文および波状文で加飾されている。

### (3) 土壙SK01 (第5、6図、図版8)

長椭円形の平面形が想定され、長径約2m、短径70cm前後の規模が想定される。底部の傾斜が大きく、最深部で65cmを測る。埋土は4層に大別され、第2層に遺物が集中している。出土遺物には甕(11~18)、高杯(19)がある。

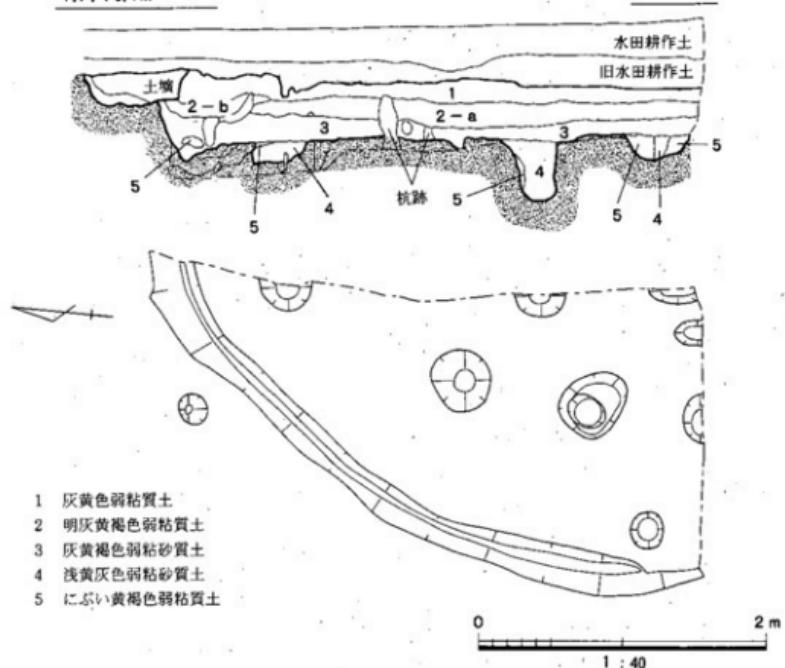
甕(11~13)は大きく「く」字状に外反させた口縁端部を著しく摘み上げる。甕(14)は口縁端部を上下に肥厚させ、甕(15)は僅かに肥厚させた端部を矩形におさめる。いずれの甕も口縁部外面には凹線あるいは疑凹線化が認められる。甕の底部(18)は著しく上げ底状を呈している。内面にはヘラケズリの痕跡をとどめている。高杯脚部(19)には2条の凹線が巡らされている。

### (4) 土壙SK02 (第7、8図、図版8)

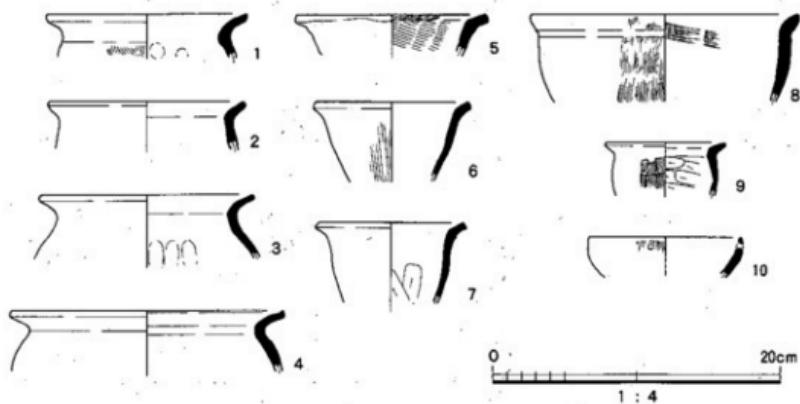
長径1.6m、短径90cmの平面形が長椭円形を呈する。深さ40cmで断面は舟底状を呈する。埋土は3層に大別され、遺物は第2・3層上面にかけて集中し、甕(20~24)、壺(25~27)、高杯(28)などが出土地している。

甕(20)は口縁端部を大きく内側に屈曲させ、端部外面には3条の凹線を施す。体部外面はハケ、内面は左右両斜め上がりのヘラケズリが施されている。甕(21)は大きく「く」字状に外反させた口縁端部をやや肥厚させ、摘み上げている。体部内面にはほぼ横方向のヘラケズリが施されている。壺(25)は口縁端部を上下に大きく拡幅させ、端部には3条の凹線を施している。壺(26)はやや薄手で、大きく外反させた後やや内傾気味に立ち上げた口縁部を有し、端部外面には3条の凹線を施している。壺(27)は、ほぼ水平方向に広げた口縁端部を上下に肥厚させる。

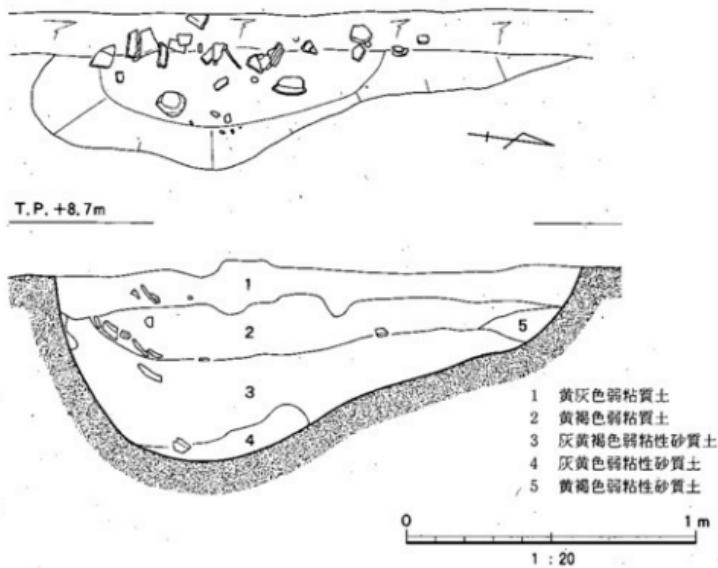
T.P. +9.1m



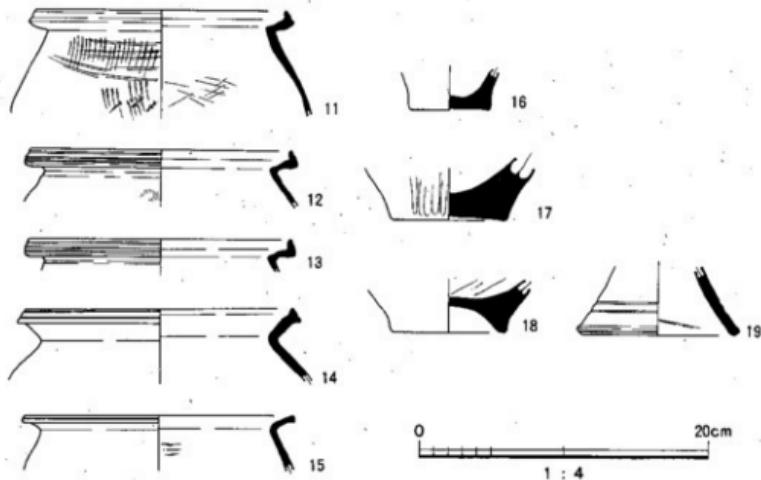
第3図 壺穴住居跡SA01



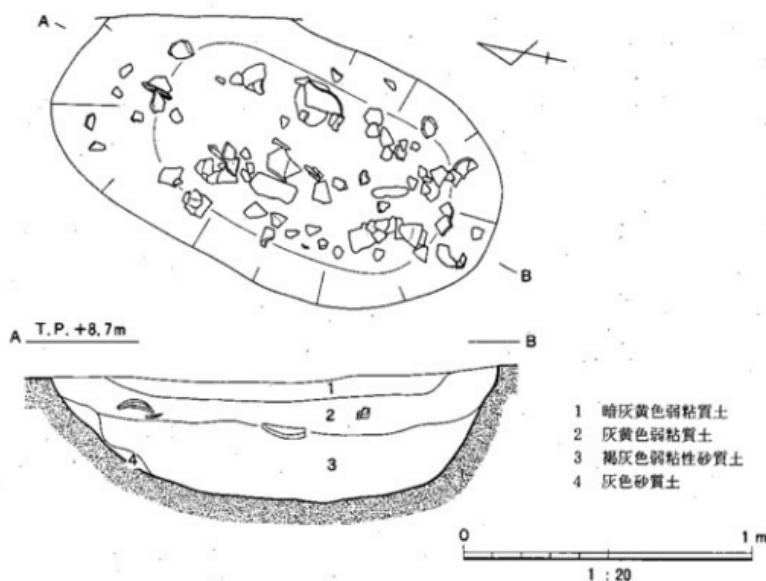
第4図 壺穴住居跡SA01出土遺物



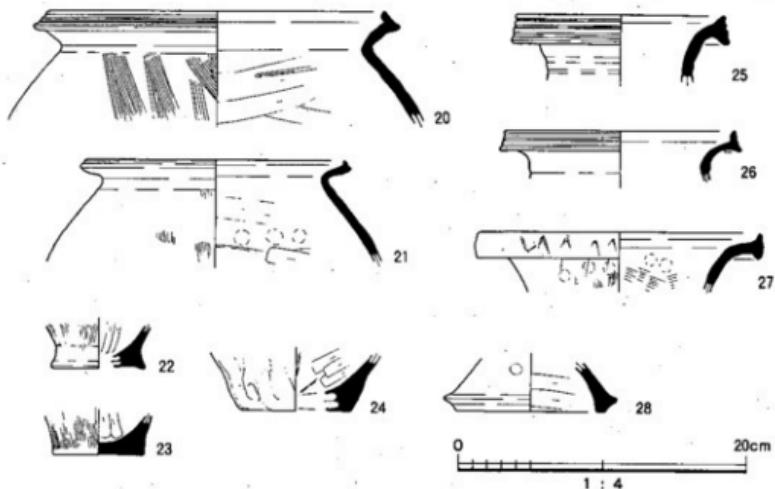
第5図 土壌SK01



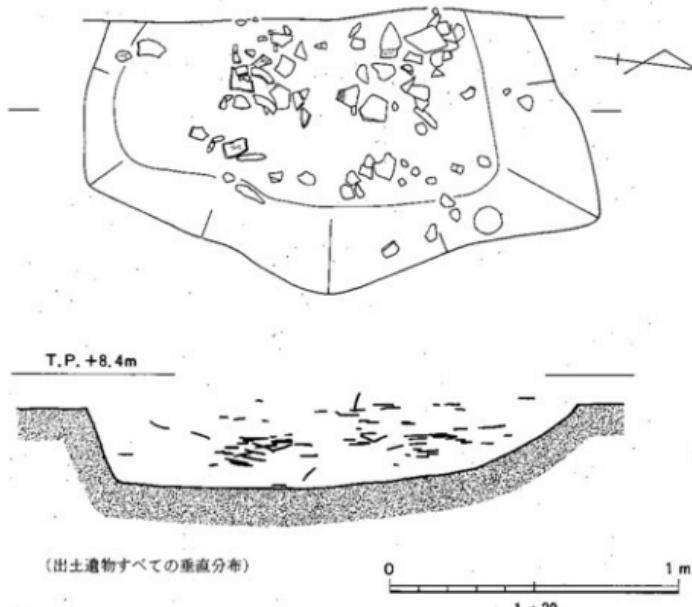
第6図 土壌SK01出土遺物



第7図 土壌SK02



第8図 土壌SK02出土遺物



第9図 土壌SK03

(5) 土壌SK03 (第9、10図、図版9)

平面形がやや歪な方形状(多角形状)を呈し、南北方向での長さが約1.8mを測る。遺構掘形は、北側がなだらかに落ち込み浅い舟底状を呈する。埋土は3層に大別され、遺物は第2層に集中するが、第9図では全出土遺物の垂直分布図化を試みた。従って図中上方に位置する遺物の出土層位も概ね第2層に該当するものである。出土遺物には甕(29~33、37~40)、壺(34~36)、高杯(41~43)などが出土している。

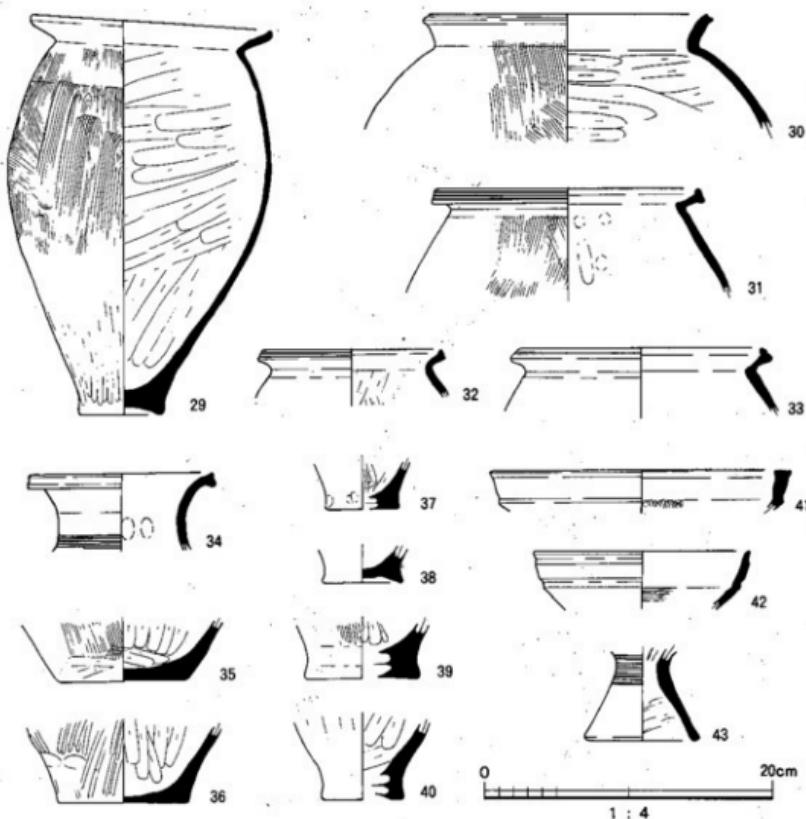
甕(29)は、今回の発掘調査で出土した土器のなかで唯一完形に近い形に復元できたものである。細長の体部から少し長めに「く」字状に外反させた口縁部は、やや肥厚させ微かに上方に摘み上げている。体部外面は下半部がヘラミガキ、上半部がハケである。内面は下半部が縦方向、上半部が斜め~横方向のヘラケズリが顕著に施されている。底部は上げ底状になっている。甕(30)は肩部が張るタイプのもので、肥厚気味に外反する口縁の端部は微かに外側へ摘み出している。体部内面は横方向のヘラケズリが顕著に施されている。甕(31)は上下に肥厚させた口縁端部外面に凹線を施す。壺(34)は頸部に6条の凹線文を施す。高杯(41)は水平な端面を成し、杯部内面には縦方向のヘラミガキの痕跡を残す。高杯(42)は端部を先窄まりにおさめ、口縁部外面の上下に幅広気味の深い凹線を巡らす。杯部内面には横方向のヘラミガキの痕跡を残している。高杯脚部

(43)は9条の櫛描直線文を施している。

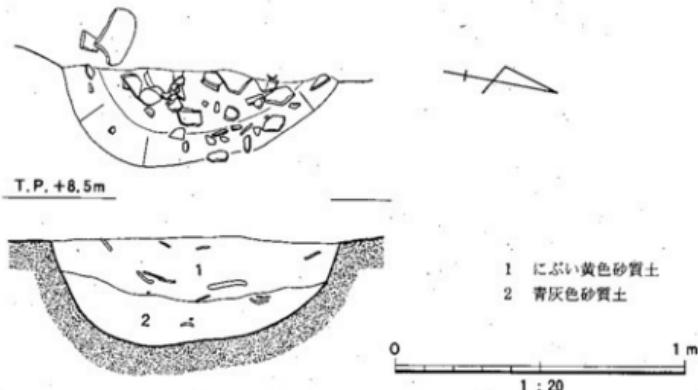
#### (6) 土壙SK04 (第11、12図、図版10、11)

長径約1m、推定短径60cm前後の平面形が梢円形を呈する小規模な土壙である。断面形はやや深めの舟底状を呈し、深さ約40cmを測る。埋土は2層に大別され、第1層下部を中心に遺物が出士している。出土遺物には壺(44~52)、甕(53~58)、高杯(60~67)、土製紡錘車(59)などがある。なお(56、57)は壺底部の可能性がある。

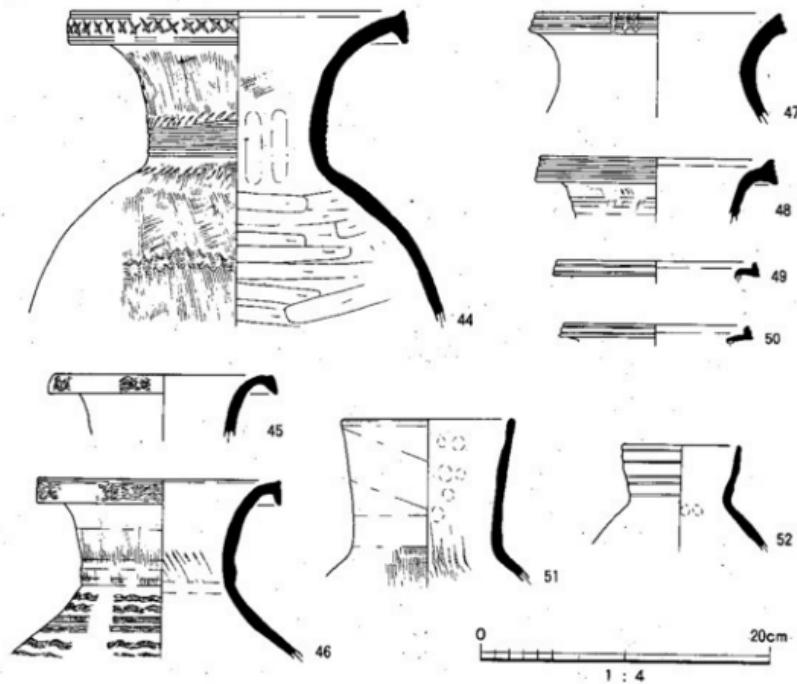
壺(44)は球形の体部から口縁部が大きく外反し、上下に肥厚させた端部外面には×字の刺突文を巡らせる。頸部には5条の凹線文とその上下にも刺突文を巡らせ、体部には櫛描波状文を施し



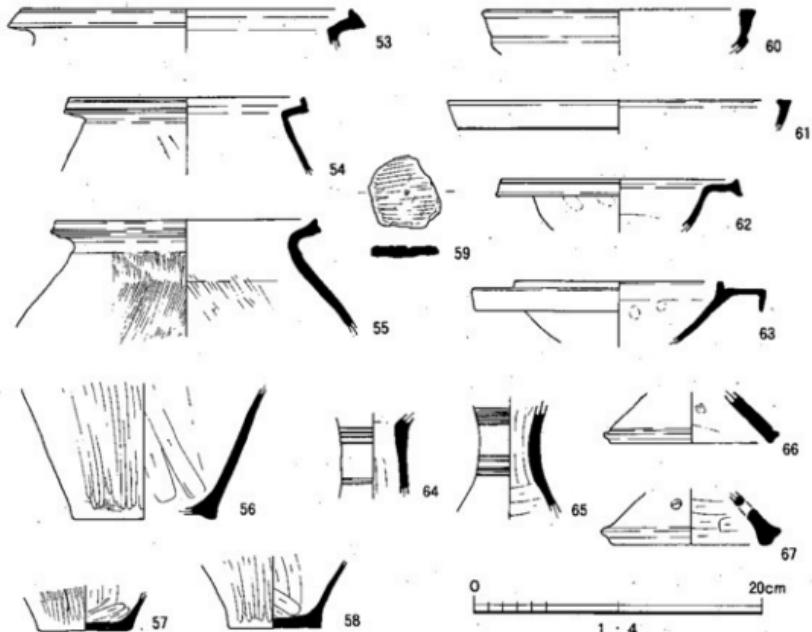
第10図 土壙SK03出土遺物



第11図 土壌SK04



第12図 土壌SK04出土遺物(1)

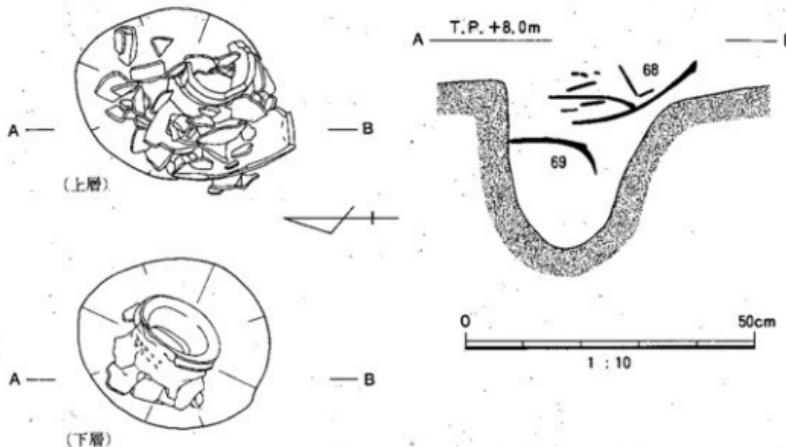


第13図 土壌SK04出土遺物(2)

ている。内面は横方向のヘラミガキが顯著に施されている。壺(46)は体部上半部を2条1単位の櫛描波状文と櫛描直線文で加飾している。また垂下させた口縁部外面にも櫛描波状文を施している。壺(51)は口縁部がほぼ垂直に立ち上がる長頸壺である。壺(52)は、やや内弯気味に口縁部が開く短頸壺で、口縁部外周に5条の凹線文を巡らす。壺(53、54)はほぼ水平方向に外反させた口縁の端部を上方へ大きく摘み上げる。壺(55)は口縁端部をやや肥厚させる。体部外面にはハケが施される。高杯(60)は垂直に立ち上げた杯部端面を肥厚させ水平におさめる。高杯(61)も杯部端面を水平におさめるが、やや内側に摘み出して肥厚させている。高杯(62)は杯部から水平に大きく広げた口縁端部を上下に肥厚させている。高杯(63)は垂直に立ち上がる口縁部の直下から水平方向に鈞状の縁部を広げ、さらにその端部を垂下させている。高杯(64、65)は多条沈線を脚柱部に施す。高杯脚部(67)は穿孔が施されている。脚端部は内外へ肥厚させ、内面は横方向のヘラケズリが施されている。

#### (7) ピットP01 (図版4)

直径、深さとも約40cmを測る。上部より壺(図版7一下)が出土している。

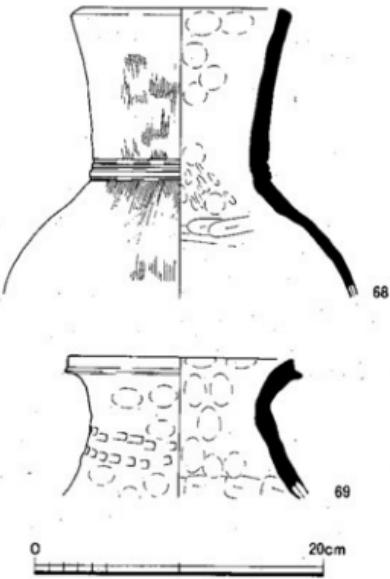


第14図 ピットP10

#### (8) ピットP10 (第14、15図、図版12)

溝SD05の底部で検出され、上部がかなり削平されているものと思われるが直径60~70cm、深さ60cmを測る。埋土は暗オリーブ灰の弱粘質土で炭化物も含んでいる。ピット内からは壺(68、69)が出土している。

壺(68)は口縁部がやや外反気味に立ち上がる長頸壺である。頸部には3条の凹線を巡らせており。体部内外面はハケ、内面には一部横方向のヘラミガキが認められる。壺(69)は、内傾する頸部から口縁部がやや肥厚ぎみに外反する。口縁端部下方をほぼ水平に摘まみ出している。外面にはヘラ状工具による刺突文が2列施されている。内面には横方向のヘラミガキ、内外面ともに指頭圧痕が顕著に見られる。



第15図 ピットP10出土遺物

### 3 小 結

水路改良工事に伴う発掘調査の多くの場合、既存水路の影響による遺構の消失が著しかったり、あるいは検出遺構のほとんどが、既存水路に先行する旧水路跡のみであったりする場合が多いが、今回の調査結果もほぼこれに該当するケースであったといえる。

既存水路にはば並走あるいは重複して検出された水路遺構（溝SD02～06）は、各々の新旧関係並びに時期差についてはほとんど不明である。しかしいずれの溝も、周辺部の水田地帯に現存する条里地割の南北方向にはば一致するものと見られ、溝SD05は出土遺物から14世紀に位置づけられることから、これらの溝は少なくとも中世の中頃以降、条里地割に附帯する水路として機能してきたものであろう。

土壌SK01～04は、いずれも遺物の出土量は僅少であるが、弥生時代中期後半の様相を示すものである。竪穴住居跡SA01は、出土遺物の甕（1～4）、鉢（5～10）に特徴付けられるように、概ね後期前半に位置づけられるが、櫛描文で加飾される壺（図版7－上・中段）が併存している事実は、この時期には中期的な様相が完全には払拭されていない状況を示すものである。このような状況は、1991年（平成3）に国府変電所の南東で実施した調査の溝SD02出土の一括資料<sup>①</sup>などにも認められるが、中～後期の過渡期あるいはその前後における土器型式の諸相解明については、今後も良好な一括資料の増加と、層位的な検討が待たれるところとなろう。

今回の調査での弥生時代の遺構検出数は少なく、竪穴住居跡については、南北約100mの調査地内の南端部で僅かに1棟検出したにすぎない。このことは調査地が居住空間の中心部から外れていることを示しているといえる。遺構密度のみで言えば、当該期の矢野遺跡のはんの一端を垣間見たに過ぎない感もあるが、周辺部の調査成果との対比を通じて集落の様相を解明していくうえで、意義のある調査成果と成り得たことには違いない。

(註)

- (1) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要6』1996年

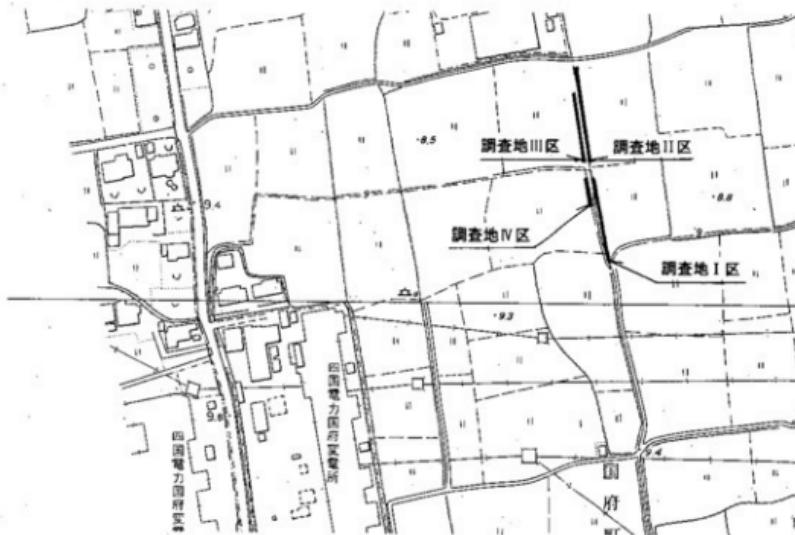


## II 矢野遺跡（市道改良工事）

### 1 遺跡の立地と環境（第1図）

調査地は1996年に市道改良工事に伴う発掘調査<sup>④</sup>を実施した箇所より北方への延長部に位置する。調査は道路建設に伴う擁壁部および排水路部を対象としたものであり、幅1.5m~2.5m、総延長は146mである（調査地I～IV区）。1996・1998<sup>⑤</sup>年調査では、弥生時代中・後期の竪穴住居跡、溝、土壌および奈良時代の掘立柱建物跡を確認しており、調査地は弥生時代の集落遺跡の一画および古代の官衙遺跡に接するものと考えられる。

調査地における基本層序について概略すると、I区の現地表面はT.P.+8.9mを測り、現代水田耕作土層下に層厚10cmを測る黄橙色砂質シルト、直下に黄色シルト～砂礫混じりシルト（遺構検出ベース層）の堆積が見られる。また調査地II区の現地表面はT.P.+8.8mを測り、南域では現代水田耕作土層下に黄灰色砂礫（遺構検出ベース層）が見られるが、北域では層厚10cmの浅黄色シルト（旧耕作土）と層厚10cmの暗紫灰色砂礫混じりシルト（包含層）が堆積し、T.P.+8.3mにおいて黄灰色シルト色（遺構検出ベース層）が見られる。調査地の南域から北域へは緩やかに旧地形が低下しており、1996年の調査地との比高差は現地表面で50cm（1996調査ではT.P.+9.4m）、遺構検出ベース層で70cm（1996調査ではT.P.+9.0m）を測る。このような堆積状況からも調査地は遺跡の中心部というよりもむしろ縁辺部に位置する可能性が考えられる。

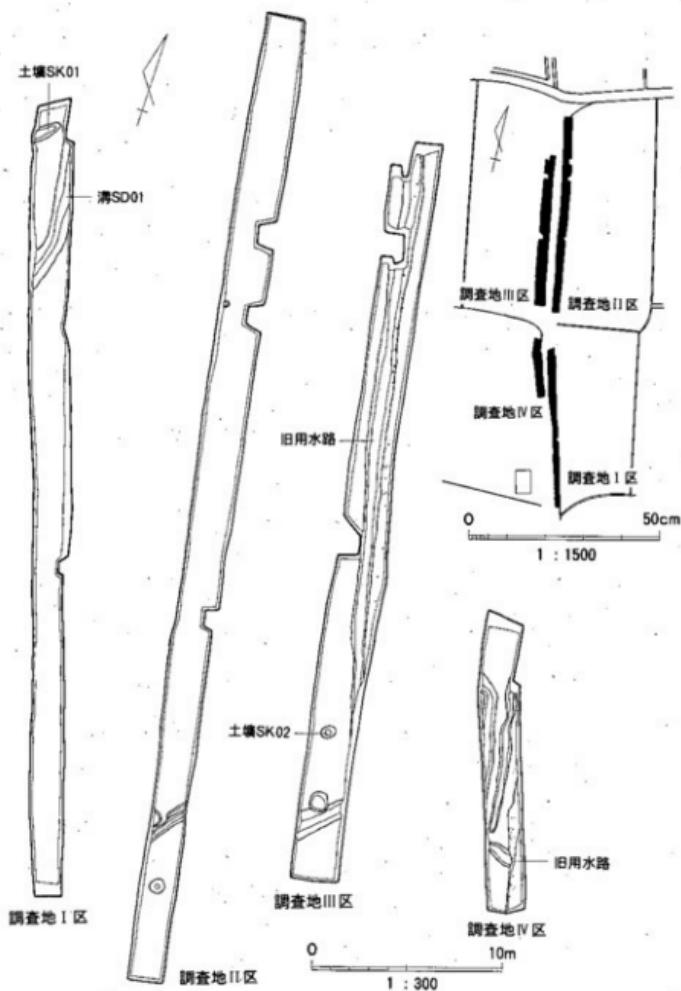


第1図 調査地位置図

## 2 検出遺構と出土遺物（第2図）

調査では前述した遺構検出ベース層上面において、溝、土壌および旧用水路を検出している。基本層序において概略したが、現代水田耕作土直下において砂礫層の堆積が見られる箇所（I 区南域およびII区ほぼ全域）においては遺構の存在率は極少である。

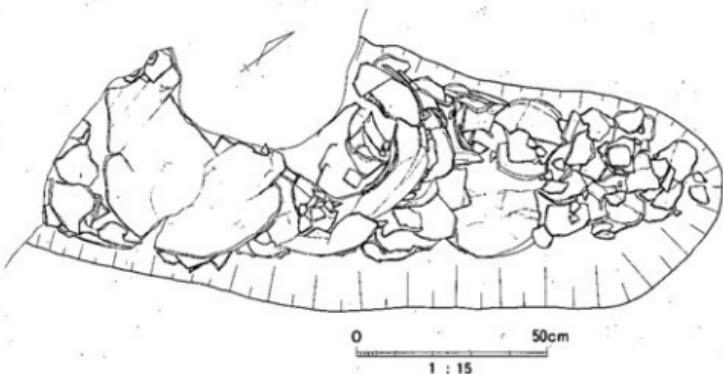
以下、主な遺構、遺物について概略する。



第2図 調査地概略図・遺構配置図

(1) 土壌SK01 (第2~8図、図版2、5~10図)

調査地I区において検出した長径1.75m、短径75cmの平面形が長円形を呈し、深さ40cmを測る廃棄土壌であり、調査地外西側に若干広がる。掘形平面形が特異な形状であること、さらに土壌内に充満した遺物の出土状況から廃棄に特殊性が考えられる。



第3図 土壌SK01遺物出土状況図

出土遺物には広口壺(1~9)、直口壺(10~15、17~20)、把手付直口壺(16、21)、甕(22~38)、高杯(39~42)、脚台付鉢(43)がある。

広口壺1は口縁端部を上下に拡張し、端面に4条の幅狭の凹線文、頸部に2条+ $\alpha$ の凹線文が巡る。2は体部から頸部が緩やかに外反し、口縁端部を下方に拡張し、端面に3条の幅狭の凹線文、体部外面上位に櫛描波状文が施される。

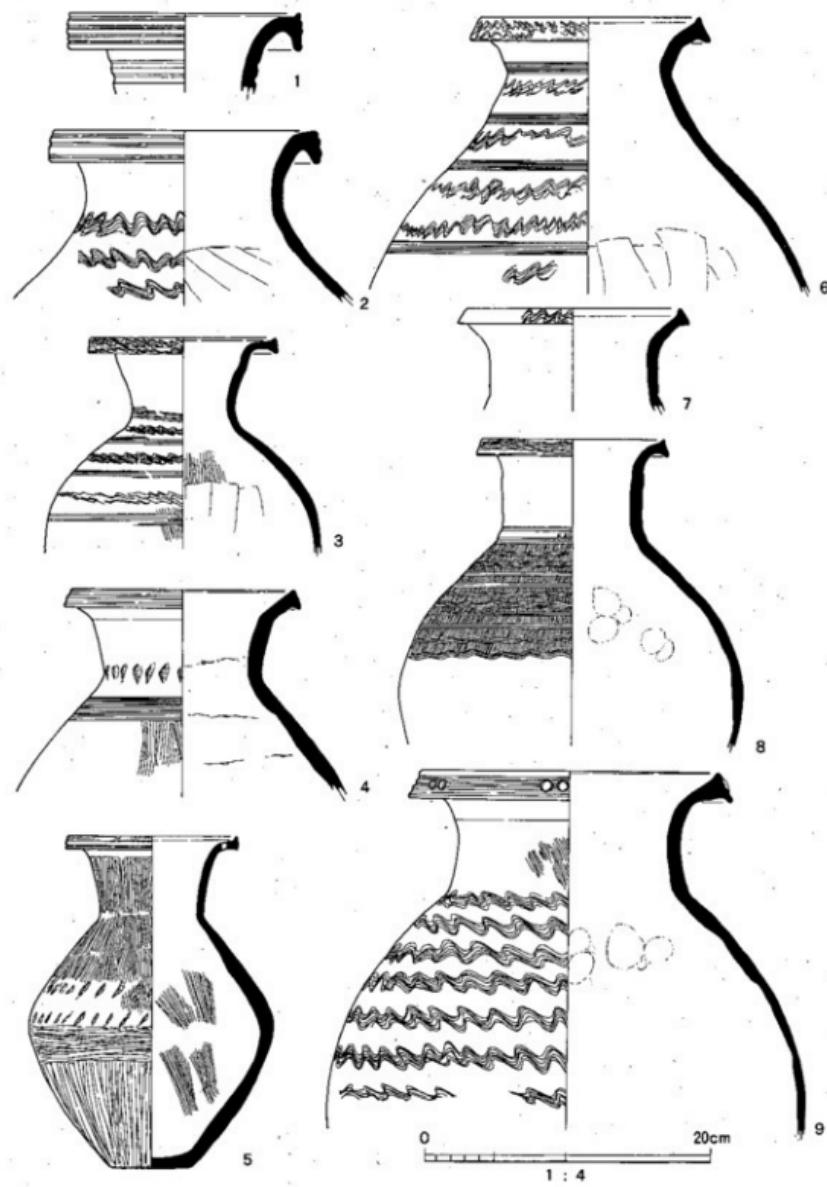
3は体部から頸部が斜め上方に立ち上がり、強く外反する口縁端部を若干上下に拡張し、端面には櫛描波状文、頸部下位から体部上半には櫛描直線文+波状文が交互に配される。

4は斜め上方に短く立ち上がる頸部から外反し、口縁端部を下方に若干拡張する。端面には2条の幅狭の凹線文、頸部下位には刺突文、体部上位には櫛描直線文が施される。

5は緩やかに外反する頸部から強く外反し、口縁端部を上方に拡張し、端面に2条の幅狭の凹線文、体部最大径およびやや上位に刺突文が2段で巡る。頸部から体部外面上位には縦位のハケ、下位には縦位ヘラミガキ+横位ヘラミガキが施される。口縁部に紐通しの穴が穿たれる。

6は頸体部から短く外反し、口縁端部を上下に若干拡張する。端面は凹面を呈し櫛描波状文が施される。また頸体部は櫛描直線文+波状文により文様を構成する。

7は直立する頸部から外反し、口縁端部を上下に拡張する。端面は平坦であり櫛描波状文が施される。8は直立する頸部から短く外反し、口縁端部の上下を若干拡張する。端面は凹面を呈し、櫛描波状文が施される。体部と頸部の境界付近から体部上半には櫛描直線文と波形の低い波状文が2条交互で文様を構成する。



第4図 土壌SK01出土遺物

9は直立する頸部から外反し、口縁端部を上下に拡張する。端面には3条の幅狭の凹線文に2個一対の円形浮文が加飾される。体部上半に櫛描波状文が施される。

直口壺10は口頸部が斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁部端面は凹面を呈する。口頸部には4条凹線文+刺突文+3条凹線文、体部と頸部の屈曲付近に刺突文が施される。

11は口頸部が斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁部端面は凹面を呈する。口頸部上位に幅狭の凹線が3条巡り、頸部と体部の屈曲部に刺突文が施される。

12は口頸部が斜め上方に直線的に立ち上がる。口縁端部は外方に若干拡張する。口頸部には4条凹線文+刺突文+3条凹線文が施される。また、頸部と体部の境界付近にも刺突文が巡る。体部内面上位にはユビオサエが見られる。

13は頸部が外反しながら立ち上がり、口頸部から体部の境界部に幅狭の6条凹線文、頸部下位および体部最大径部より上位に2段の刺突文が施される。

14は頸部が短く直立し、内湾気味に立ち上がる。口頸部から体部の境界部に幅狭の7条凹線文が巡る。体部外面上位には縦位のハケ、体部外面下半には縦位ヘラミガキ+横位ヘラミカキが施される。また、体部上半には櫛描波状文が施される。

15は直立する頸部から緩やかに外反し、口縁部端面は凹面を呈し、端部を内外に若干拡張する。口頸部上位に幅狭の3条凹線文、頸部下位に刺突文が巡る。頸部外面は縦位ハケ、体部外面には縦位ハケが施されるが、右下がりのタタキの痕跡がある。体部内面は縦横位のヘラケズリが施される。

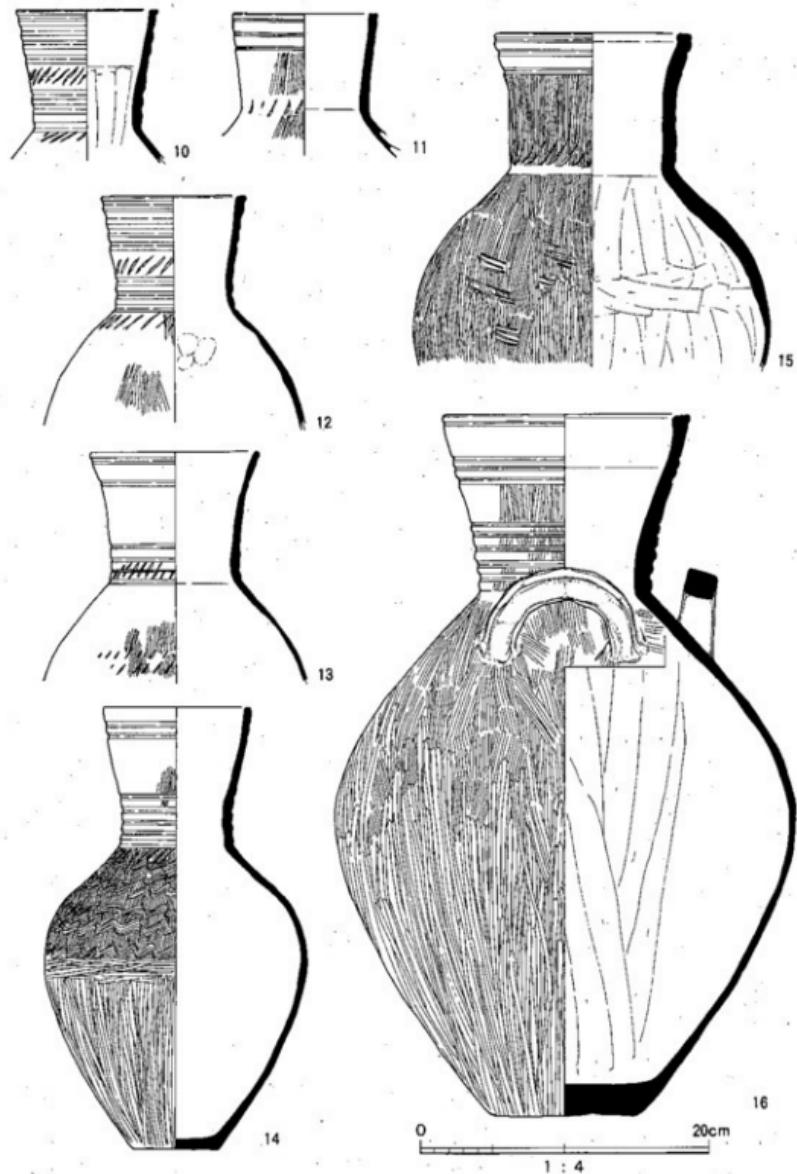
17の口頸部は緩やかに外反し、口縁端部は丸くおさめる。頸部は無文である。

18の口頸部はわずかに斜め上方に直線的に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。頸部から体部外面上半は縦位ハケ、体部外面下半には縦位ヘラケズリが施される。頸部外面に線刻文様が描かれる。19は上方に直線的に立ち上がる頸部からわずかに外反する口縁部にいたり、口縁端部は丸くおさめる。頸部から体部上半は縦位ハケ、体部外面下半は縦位ヘラミガキが施される。頸部外面に線刻文様が描かれる。18、19の線刻文様は棘状图形であり、弧帶文単位图形や直弧文原単位图形に相当する图形の一部としての可能性がある<sup>④</sup>。

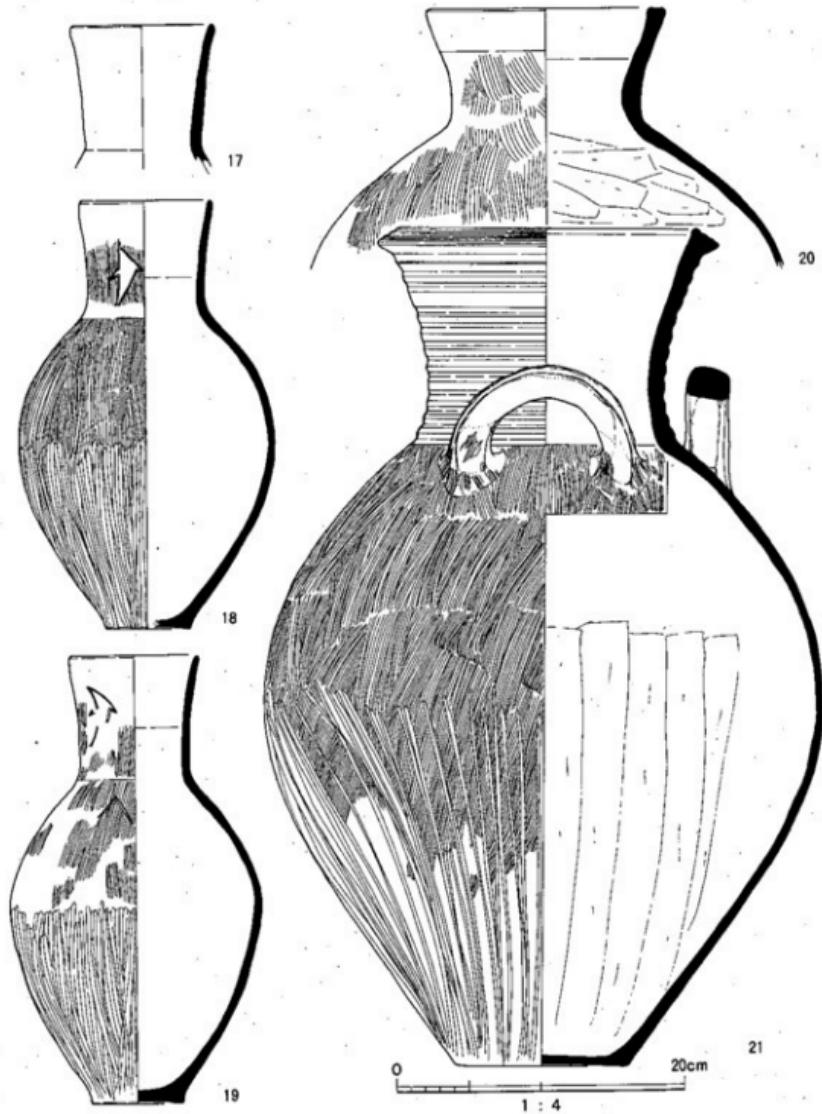
20は口頸部が斜め上方へ直線的な短く立ち上がり、口縁部端面は凹面を呈する。頸部から体部外面は縦位の粗いハケ、体部内面は横位ヘラケズリが施される。

把手直口壺16は外反する頸部から内湾気味に立ち上がる口縁部にいたる。口縁部端面は2条の凹面を呈する。口縁部直下に1条、頸部に8条の凹線文が巡る。頸部から体部外面には粗い縦位ハケ、体部内面には縦位ヘラケズリが施される。

21の口頸部は外反しながら立ち上がり、口縁端部を内外に拡張し、端面には3条の凹面を呈する。口頸部には12条の凹線文が巡る。体部外面には縦位の粗いハケ、体部外面下位には縦位ヘラミガキ、体部内面には縦位ヘラケズリへが施される。



第5図 土塙SK01出土遺物



第6図 土壇SK01出土遺物

斐22～27、34は口縁端部を上下に拡張し、端面に2～3条の幅狭の凹線が巡る。

25は体部外面上半に横位タタキ+縦位ハケが施された後、体部最大径部よりやや上位に2段の刺突文が巡る。体部内面には縦位の細かなハケが施される。

26は体部外面に横位のタタキ+縦位ヘラミガキが施され、体部最大径部よりやや上位に2段の刺突文が巡る。体部内面下位には縦位ヘラケズリが施される。

34は体部外面に右下がりのタタキ+縦位ヘラミガキが施される。体部内面上位1/3には縦位ハケ、下2/3には縦位ヘラケズリが施される。

28、29は口縁端部を上方に拡張し、2条の幅狭の凹線文が施される。28、29の体部外面上位には横位タタキが施される。29の体部最大径部より上位には3段の刺突文が巡り、体部内面下半には縦位ヘラケズリ、上位にはユビオサエが見られる。

30、31は口縁端部を上方に拡張するが、端面は無文である。30は体部外面に縦位の細かなハケ、体部内面は頸部屈曲部までヘラケズリが施される。体部外面に刺突文が巡る。31は体部外面に横位タタキが施される。

32は口縁端部の拡張はおさまっているが、端面には2条の幅狭の凹線文が巡る。体部外面には縦位のハケ+縦位ヘラミガキ、体部内面には横位ヘラケズリが施される。

33～37は口縁端部を上下に拡張するが、端面は凹面を呈し無文である。37は体部外面に横位のタタキが施される。

38の口縁部は短く「く」の字状に外反し、端面は平坦であり無文である。

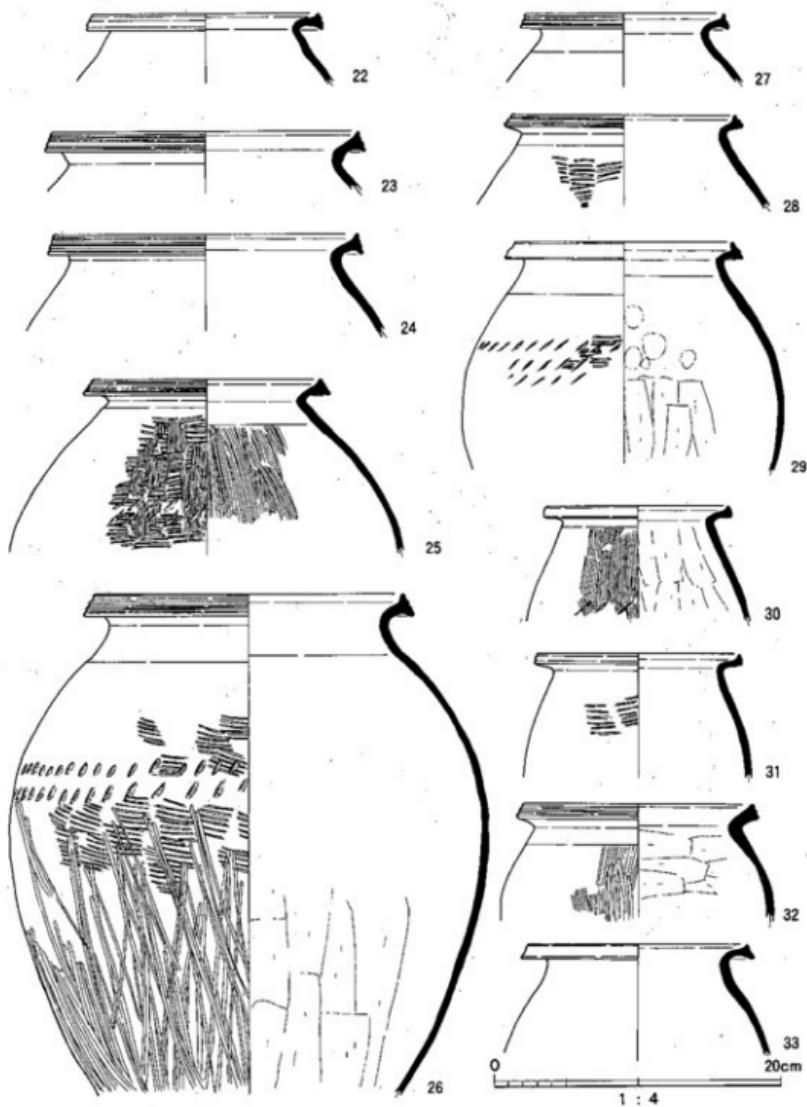
高杯40は皿形の坏体部から短く若干外傾する口縁部をもち、端面は2条の凹面を呈する。口縁部直下および坏部との境界部に幅狭の凹線が巡る。

41は皿形の坏体部から短く直立する口縁部をもち、端部を内外に拡張し、端面は凹面を呈する。口縁部直下および坏部との境界部に幅狭の凹線が巡る。内外面に横位ヘラミガキが施される。

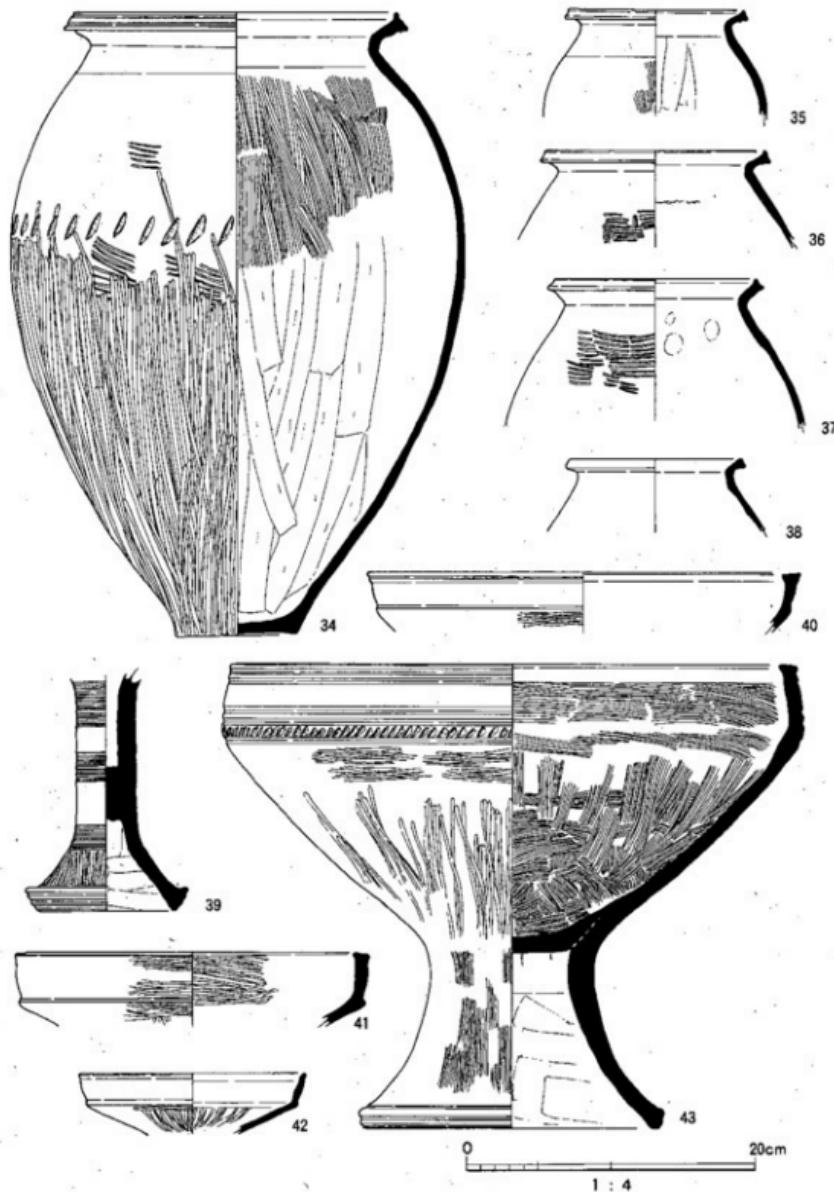
42は坏体部からわずかに外傾する口縁部をもち、端部は丸くおさめる。口縁部直下および坏部との境界部に退化した幅狭の凹線が巡る。坏部外面に縦+横位ヘラミガキ、内面に縦位ヘラミガキが施される。

39は細い脚柱部に櫛構直線文が施され、裾部は「ハ」の字状に開く。脚端部を上方に拡張し、端面に3条の凹線が巡る。裾部内面は横位ヘラケズリが施される。

脚台付鉢43は内弯気味に立ち上がる体部から内傾する口縁部にいたる。口縁端部を内外に拡張し、端面は3条の凹面を呈する。口縁部直下に2条、体部と口縁部の屈曲付近に3条の凹線文が巡る。また、凹線文間に刺突文が施される。脚端部をわずかに拡張させ、端面に2条の凹線文が巡る。鉢と脚の接合法は円盤充填である。鉢部外面は横+縦位ヘラミガキ、脚部外面に縦位ハケ、鉢部内面に不定方向のハケ、脚部内面は横位ヘラケズリが施される。



第7図 土壌SK01出土遺物



第8図 土壌SK01出土遺物

### (2) 溝SD01 (第2、10図、図版3、11)

調査地I区において検出した幅1m、深さ10~20cm、断面形が深い皿状を呈する溝である。

出土遺物には甕(44、45)、直口壺(46)がある。

甕44は口縁部が「く」の字状に短く外反し、端面は平坦である。底部ははわずかに平坦面が残るが、体部への屈曲は明瞭でなく、丸底化へ移行しつつある。45は「く」の字状に短く外反し口縁端部をはわずかに上方に摘み上げる。端面は平坦である。体部外面は縦位の細かいハケ、体部内面上位1/3はユビオサエ、下位2/3はヘラケズリが施される。

直口壺46は口頭部が外反しながら立ち上がり、体部が扁平化した球体状を呈し、底部は丸底を呈する。口頭部および体部上半外面に縦位ヘラミガキ、体部内面に不定方向のハケが施されている。

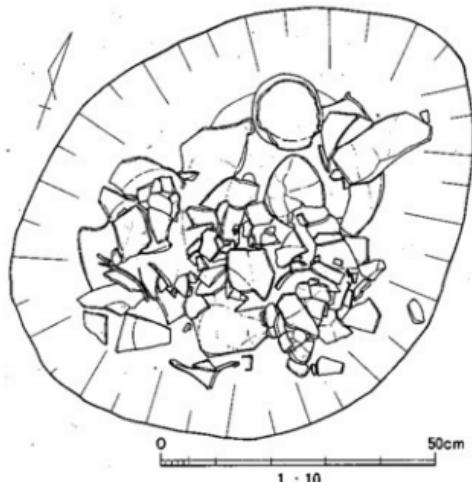
### (3) 土壙SK02 (第2、10図、図版4、11、12)

調査地III区において検出した長

径95cm、短径75cmの横円形を呈し  
深さ15cmを測る廃棄土壙である。

出土遺物には甕(47~50)、鉢  
(50、51)がある。

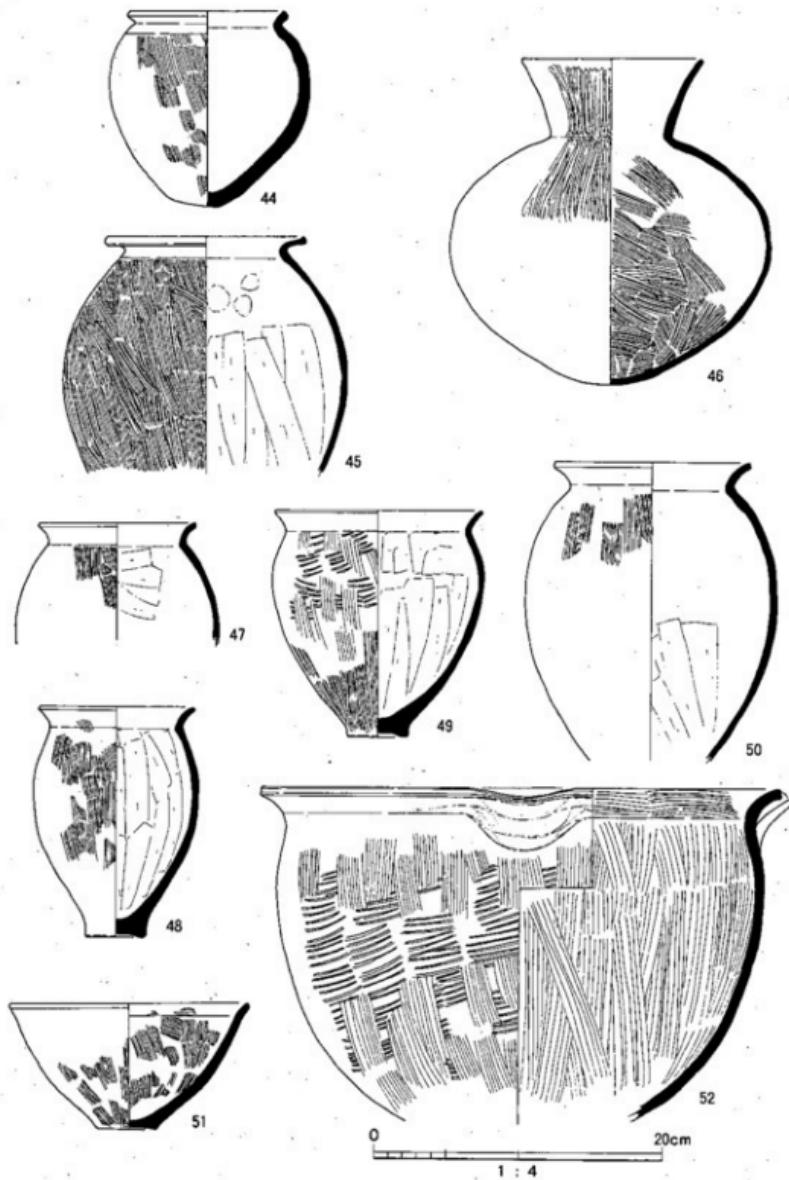
甕47は「く」の字状に短く外反する口縁端を呈し、端面は平坦である。体部外面に縦位ハケ、体部内面は横位ヘラケズリが頭部まで施される。48は「く」の字状に短く外く外反する口縁部を呈し、端部は丸くおさめる。底部中央が凹面を呈する。体部外面は縦位ハケ、体部内面は縦位ヘラケズリが頭部まで施される。49は「く」の字状



第9図 土壙SK02遺物検出状況図

に短く外反し、端部は丸くおさめる。体部外面上半には横位もしくは左下がりのタタキ後、縦位ハケ、下位には縦位ハケが施される。体部内面下位2/3には縦位ヘラケズリ、上位1/3は横位ヘラケズリが施される。底部は凹面を呈する。50は「く」の字状に短く外半する口縁部であり、端面ははわずかに凹面を呈する。体部外面に縦位ハケ、体部内面下位に縦位ヘラケズリが施される。

鉢51は外方向に内弯気味に立ち上がる体部からはわずかに外反する口縁部を呈する。端面は平坦である。体部外面に縦位ハケ、体部内面に不定方向のハケが施される。52は内弯しながら立ち上がる体部に外反する口縁部に注口を持つ片口鉢である。体部外面には左下がりのタタキ後、縦位の粗いハケ、口縁部内面は横位の粗いハケ、体部内面には縦位の粗いハケが施される。



第10図 溝SD01(44~46)、土壤SK02(47~52)出土遺物

### 3 小 結

今回の調査地に南接する地域では弥生時代中期あるいは後期の竪穴住跡群や中期の周溝墓群が確認されていることから、弥生集落の基本生活領域が存在するものと考えられる。今回の調査地は住居跡を含めた諸遺構の数量が極めて少ないとから、周辺に存在する弥生集落の周縁部もしくは集落の基本生活領域内の間隙部に相当する箇所なのであろう。

土壌SK01、02、溝SD01出土遺物は、矢野遺跡における弥生時代中期から後期に至る土器様相を考える上で貴重な資料である。

土壌SK01は一括廃棄資料である。広口壺は口縁端部を上下に拡張し、端面には2～4条の幅狭の凹線がめぐるもの(1～5、9)と端面が単に凹面を呈するもの(6～8)があり、口縁部端面および体部外面には櫛描直線文や波状文、円形浮文、刺突文により加飾される。凹線文や体部への装飾化が顕著であり中期的な様相を多分に含んでいる。直口壺は口頭部に凹線文と刺突文により構成するもの(10～16、21)と口頭部が無文であり、特に頭部に線刻文様をもつもの(18、19)がある。口頭部に凹線文を持つ一群の中でも凹線条数に差異が見られることを考慮すれば、凹線文盛行期から消失に至る時期の資料と考えられる。壺は口縁端部を上下に拡張し、端面に2～3条の幅狭の凹線文をもつもの(22～29、34)、口縁端部を上方に拡張し端面が平坦もしくは極めて退化した凹線文をもつもの(30、31)、口縁端部の上下の拡張がおさまるが端面には2条の凹線文をもつもの(32)や単に凹面を呈するもの(33、35～37)、口縁端部の断面形が方形状を呈し、端面が平坦を呈するもの(38)がある。これらは凹線文の消失および口縁端部の形状の単純化への過程において暫定的に生ずるものと考えられる。高杯は口縁部の立ち上がりが直立するもの(40、41)と外頬気味のもの(41)があり、いずれも口縁部に施される凹線文は鈍い。

このようにSK01出土資料は、各器種において凹線文の盛行から消失傾向が見られ、長頸広口壺や細頸壺の出現以前の土器様相を示すものと考えられる。

次に土壌SK02出土資料について見ると、壺は口縁部端面が平坦もしくは丸くおさめられ単純化し、凹線文は完全に消失していることから、土壌SK01に後続する資料である。ただし、依然として底部の屈曲は明瞭であり、体部内面のヘラケズリは頭部屈曲部まで施される。

さらに、溝SD01出土の壺は底部の屈曲が不明瞭であるもの(44)や口縁端部を上方に摘み上げ、体部内面のヘラケズリの位置は下降し、体部内面上位にはユビオサエが施されるもの(45)がある。また、扁平球体状の体部に丸底を呈する壺(46)があり、土壌SK02より後出するものであろう。

このように、土壌SK01→SK02→溝SD01への土器様相の変遷において、特に、土壌SK01出土資料は弥生時代中期に見られる形態と技法を伝統的に根強く残し、全体的に漸移的な型式変化を遂げている。これが後期前半の土器様相の曖昧さに通じるものもある。そして、土壌SK01出土資料が示すように、廃棄時での一括資料という点において、変化過程の諸型式の時間的な共存

の可能性が考えられる。今後、層位的な出土を踏まえた一括資料において、詳細な検討が必要とされる。

(註)

- (1) 徳島市教育委員会『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要』8、1997年。
- (2) 徳島市教育委員会『阿波国府跡発掘調査報告書』、1999年。
- (3) 線刻文様の解釈については、菅原康夫氏の御教示による。

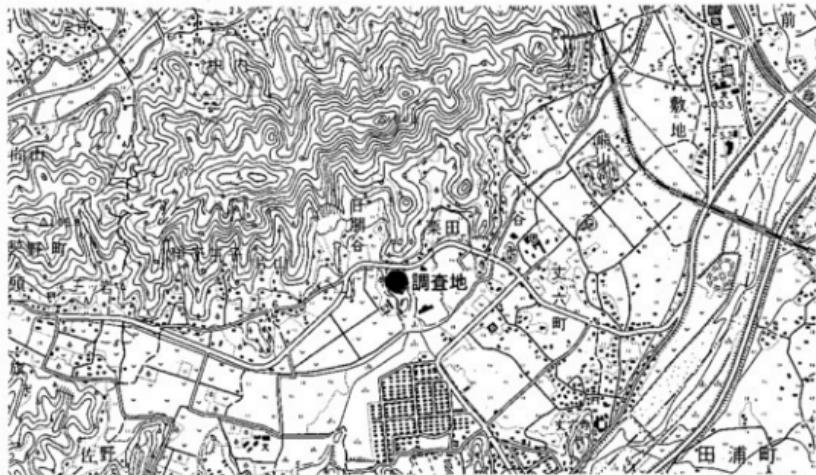
### III マンジョ塚2号墳 (市道拡幅工事)

#### 1 調査に至る経緯と経過 (第1図)

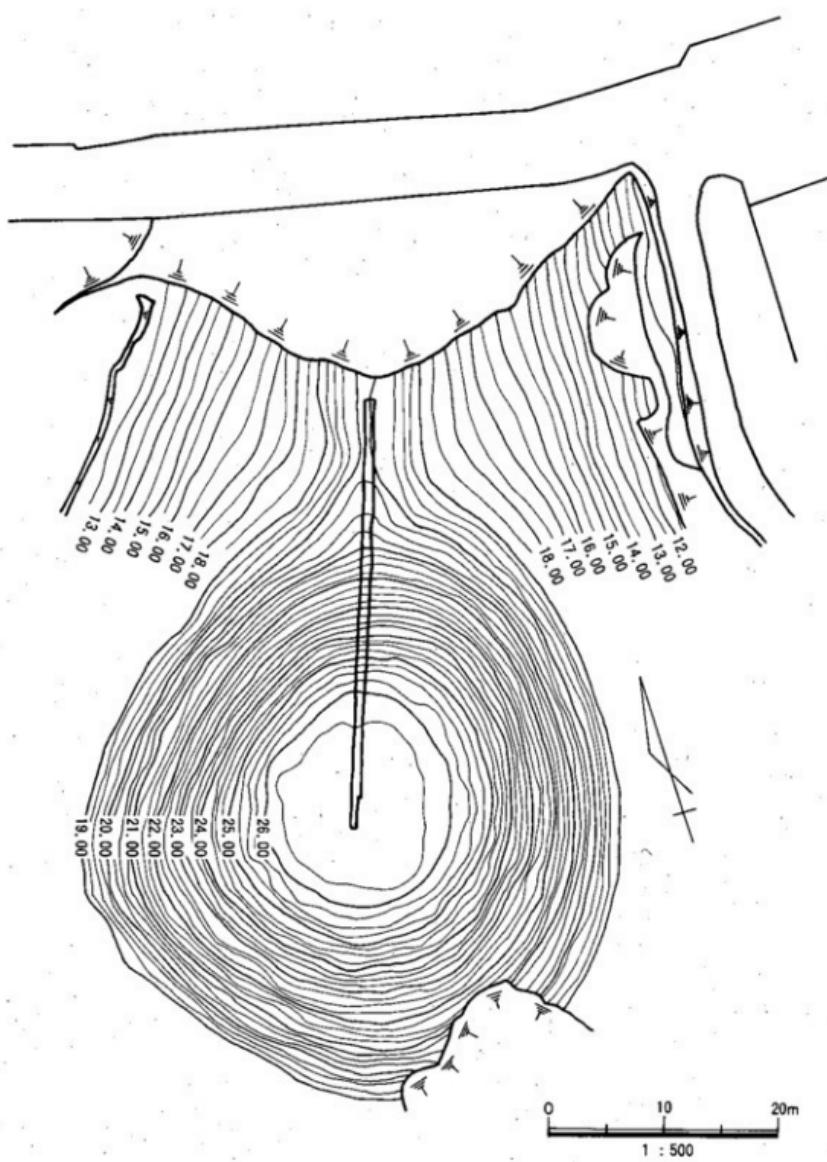
1923年(大正12)に出版された徳島県勝浦郡教育會の『勝浦郡志』の記載に、「マンジョノ原」に所在する4・5個の古墳内の1基を「マンジョ塚」と名付けているが、それ以外のものについては名称や詳しい記述はみられない。また、1953年(昭和28)に出版された阿波史研究会の『徳島県古墳調査報告』にも、今回の調査で確認された古墳については該当する記述はなく、また、付近の住民の方々からの聞き取り調査からも明確な回答が得られなかった。そこで、今回の発掘調査において確認された古墳の名称については「マンジョ塚2号墳」と呼称することにする。

当地域におけるこれまでの発掘調査は多くはないが、今回の調査地の南側の尾根には、県指定史跡「渋野の古墳群」の一つであるマンジョ塚が存在する。マンジョ塚2号墳は、マンジョ塚に向けて南方向に伸びる尾根の小丘上に存在する。この尾根は現道によって分断されているが、かつては分断されている北側の尾根上からマンジョ塚2号墳の上を通る旧道があり、現道の北側に残る旧道の坂を通称「狭坂(せばさか)」と呼んでいた。

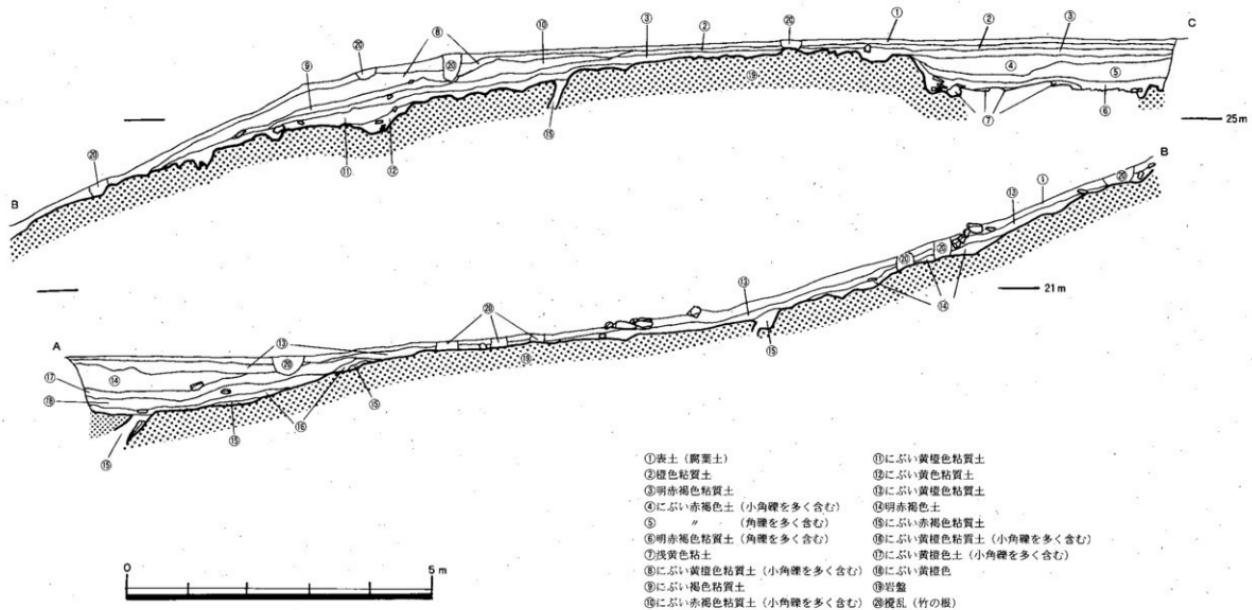
今回の調査は市道丈六・渋野線道路改築工事に伴うものである。当地においては、以前からの現地踏査により古墳の存在が想定されていた。現道拡幅に伴い掘削を受ける南側に伸びる尾根および南方への小丘部を対象に、トレーナーを設定し、古墳の存在および範囲確認を目的とする発掘調査を実施した。



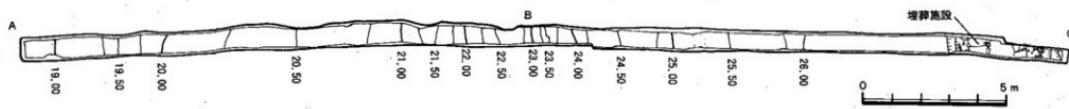
第1図 調査位置図



第2図 地形・填丘測量図、トレンチ配置図



第3図 調査区断面図



第4図 調査区平面図(上)・埋葬施設平面図(下)

## 2 調査概要 (第2~5図、図版1~3)

旧道沿いに築かれた石垣の一部、および古墳の石室を検出している。出土遺物には円筒埴輪および形象埴輪、土師器が出土している。以下、主な遺構と遺物について概略する。

### (1) 石垣 (第3図)

調査区北隅部において検出された石垣である。出土遺物はなく、構築時期については不明である。現在、現道により分断しているが、北側の尾根に一部残っているものに続くものと考えられる。『勝浦郡志』に記述のある石垣の可能性がある。

### (2) 墳丘 (第2、4、5図、図版1、3)

全体的に腐植土層が覆っており、その直下に岩盤が検出される。小丘の上部付近において、急に岩盤の傾斜が緩やかになり盛土が確認される。岩盤はこの後落ち込み、すぐ立ち上がりほぼ平坦になった。この地形変化が古墳造営のためか、もしくは後世の開墾等の影響によるもののかは不明である。この盛土も墳丘の中心部に至り薄層となる。この盛土からは遺物は出土していない。なお、尾根の平坦部から小丘へ立ち上がる個所で、土師器高杯(1)を表採した。

土師器高杯は磨滅が著しい。

### (3) 主体部 (第3~5図、図版2、3)

調査区南端部において、埋葬施設の蓋石の一部を検出した。埋葬部の堆積状況は、腐植土直下において角礫を主体とした小礫層が堆積する。また、第3層からは埴輪片等が集中的に出土している。蓋石を重ね合わせている部分には、粘土を詰めている。

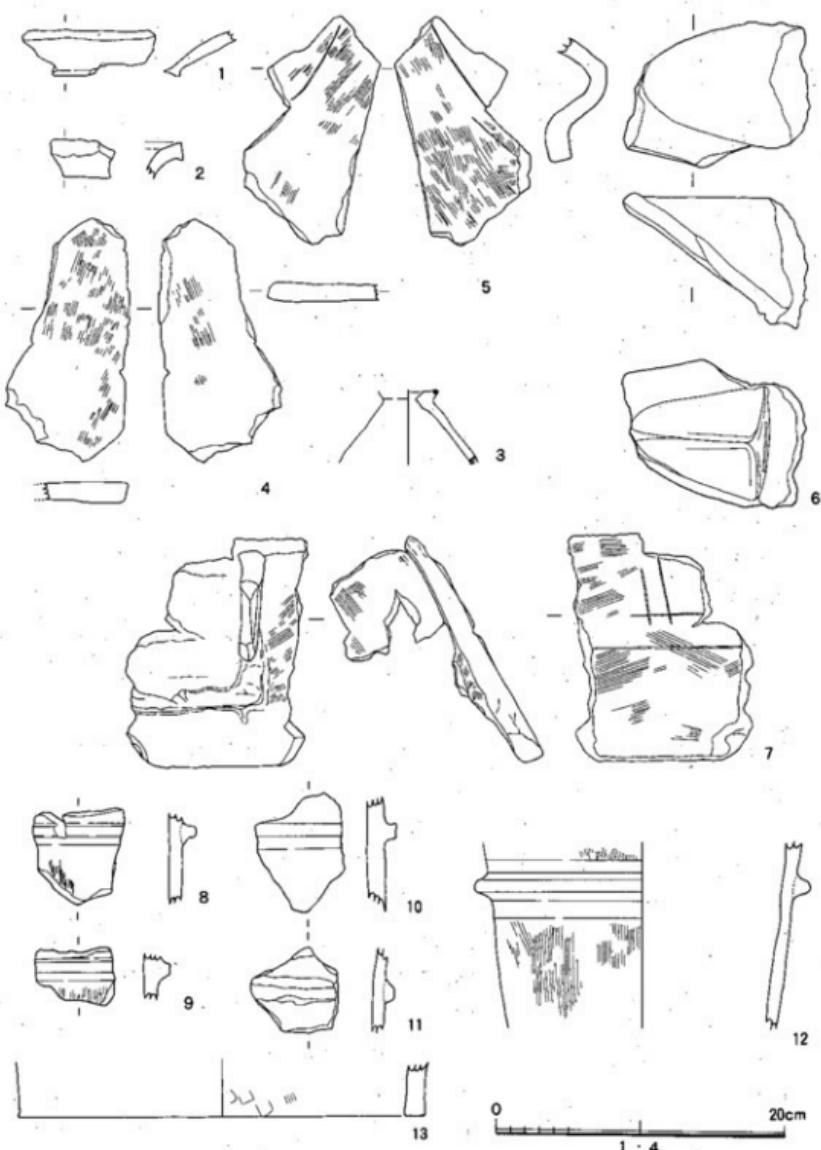
出土遺物は原位置を保つものは見られないが、土師器壺(2)、器台(3)、蓋形埴輪(4、5)、家形埴輪(6、7)、円筒埴輪(8~12)、埴輪底部片(13)のほか、朝顔形埴輪(肩部)や円筒埴輪(口縁部)がある。

壺2は磨滅が著しいが、ナデの痕跡がある。器台3は磨滅が著しく調整は不明である。

蓋形埴輪4の胎土は精良であり、焼成は良好である。内外面にはハケが施される。5の内外面にはハケが3条施される。

家形埴輪6の胎土は砂粒を多く含むが、焼成は良好である。屋根の棟端部であり、内面はナデが施される。外面は磨滅が著しく調整は不明である。7の胎土は精良で焼成も良好である。屋根の軒端部である。内面はナデ、外面にはハケが施される。壁は剥落しているが、屋根の接合部にはハケが施される。屋根の外面は沈線による線刻文様が施される。

円筒埴輪8のタガは断面形が台形を呈し、突出度が高い。外面の1次調整にはタテハケ、内面にはケズリが施される。9は外面の1次調整にはタテハケ、内面にはナデが施される。10、11は磨滅が著しく調整は不明である。12のタガは断面形が台形を呈し、突出度が高い。外面の1次調整にはタテハケが施される。底部13の外面はナデ、内面はタテハケ+ユビオサエが施される。



第5図 出土遺物

### 3 小 結

今回の調査において確認された古墳については、『勝浦郡志』に記述されている前方後円形の古墳である可能性が想定されたが、墳形については円墳であると考えられる。

古墳の規模については、南側の墳丘裾部は未確認であるが、小丘上で確認した盛土層の北端を墳丘の裾部と仮定するなら、地形測量をも考慮に入れると、直径約20mを測る円墳と想定される。また、地形測量の結果から、東側を除く斜面に等高線の間隔のやや広いところが見られる。ここを墳丘の裾部と考えるならば、直径約35mを測る円墳とみることも可能である。今回確認された埋葬施設の規模から、後者の可能性が高いと考えられる。なお、埋葬施設の主軸方向は東西方向と想定される。

最後に、出土遺物からマンジョ塚2号墳の年代観について検討してみる。埴輪には黒斑が見られ、円筒埴輪の透孔の形には四角形または三角形が想定されるものがあること、さらに、器壁が内面のケズリにより薄く作られていることなどから、川西編年II期に該当する<sup>11)</sup>。この年代観は、徳島市国府町西矢野に所在する奥谷1号墳に併行し、マンジョ塚2号墳より西方1.2kmに位置する浜野丸山古墳より前出するものである。今後、出土遺物の詳細な比較検討が必要である。

(註)

- (1) 川西宏幸氏の資料実見により御教示いただいた。

写 真 図 版

I 矢野遺跡（水路改良工事）



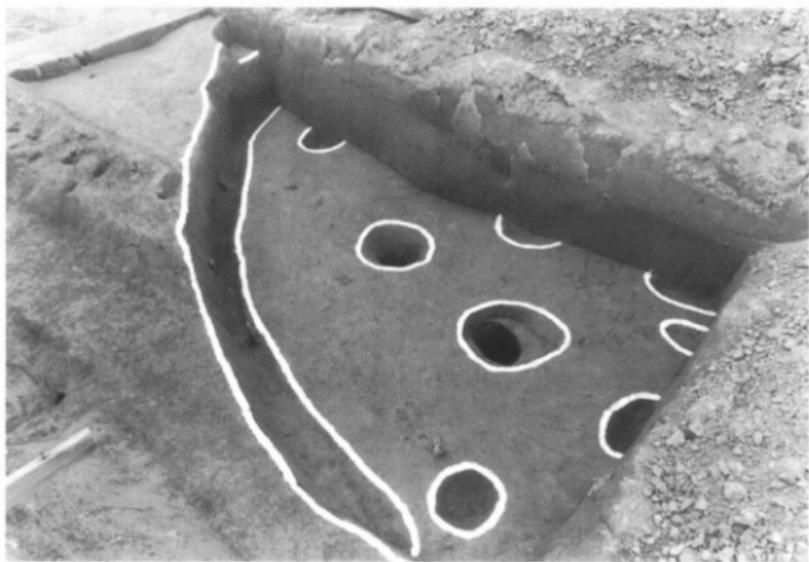
調査区全景 (SA01 検出前)

南より



調査区北半部

南より



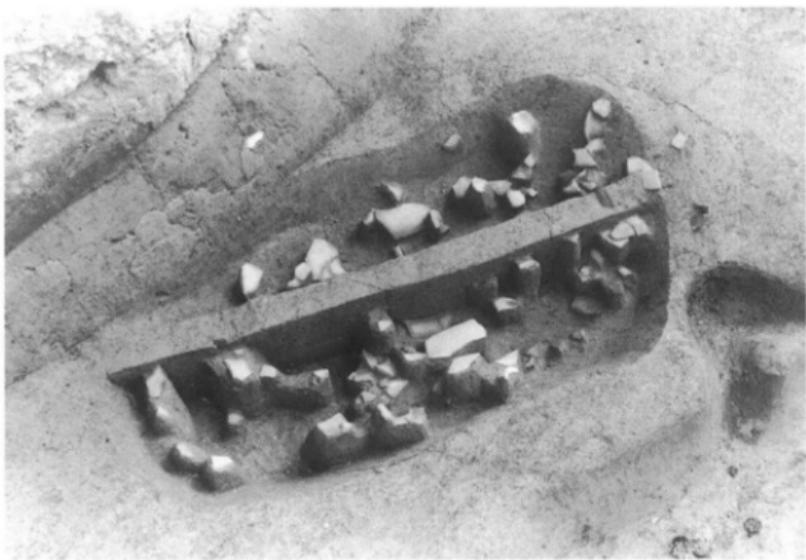
堅穴住跡 SA01

南西より



土壤 SK01 遺物出土状況

北東より



土壤 SK02 遺物出土状況



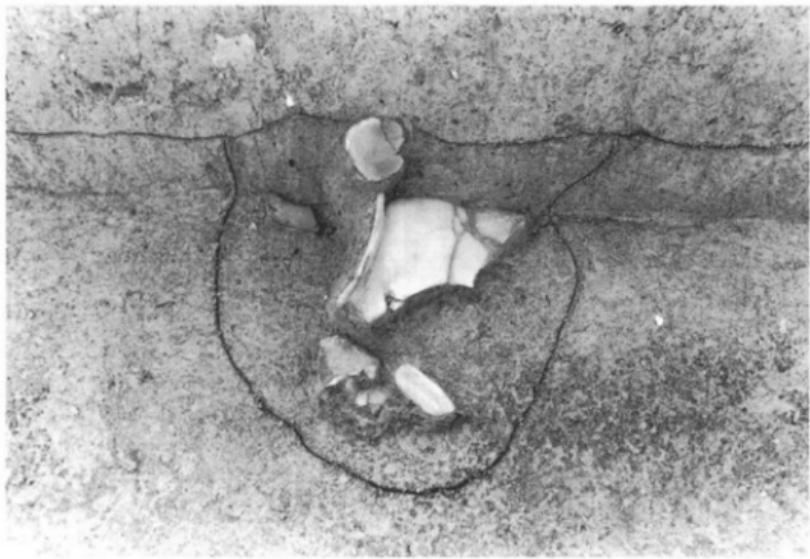
土壤 SK03 遺物出土状況

北東より



土壌 SK04 遺物出土状況

北東より



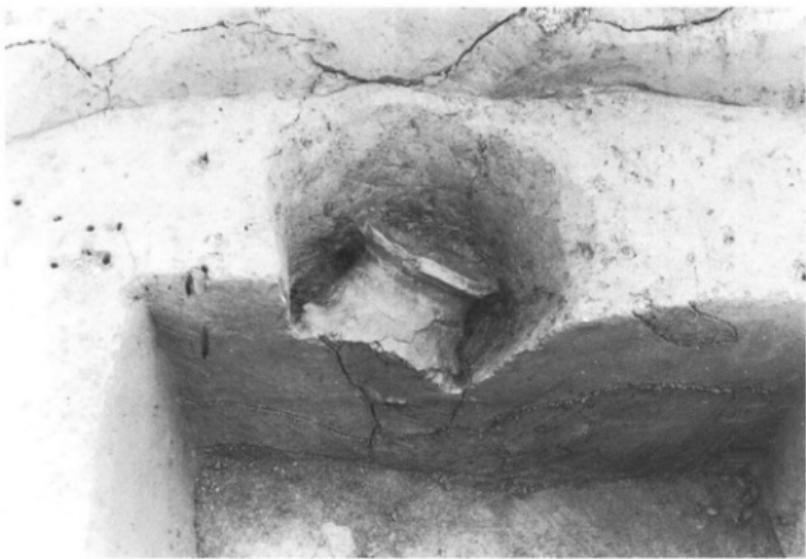
ピット P01 遺物出土状況

東より



ピットP10 瓢(68) ほか出土状況

北西より



ピットP10 瓢(69) 出土状況

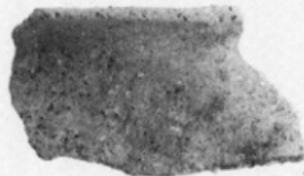
西より



1



6



3



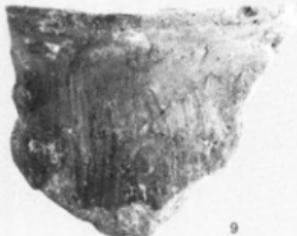
8



4



5

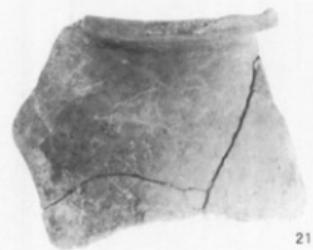
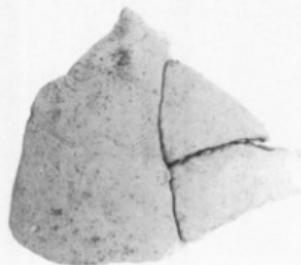


9

堅穴住居跡 SA01 出土遺物



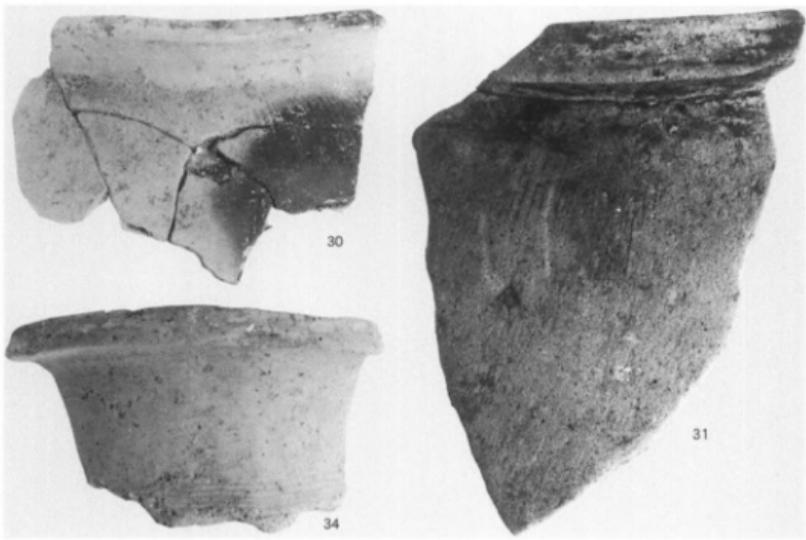
堅穴住居跡 SA01 (上・中)、ピット P01 (下) 出土遺物



土墩 SK01 (11, 14), SK02 出土遺物



29

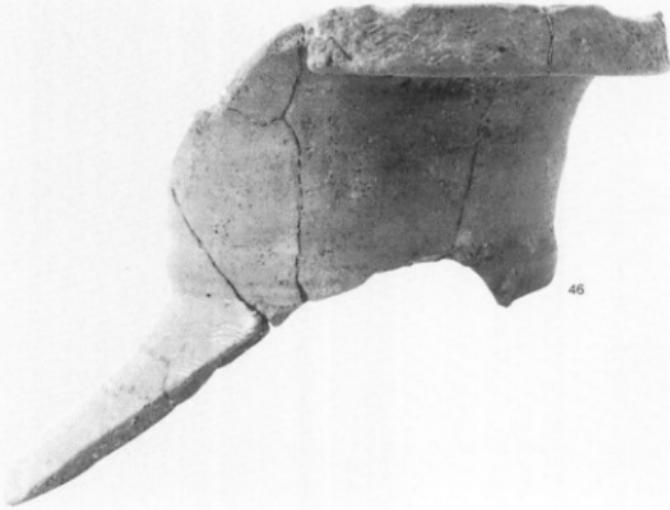


30



31

土壤 SK03 出土遺物



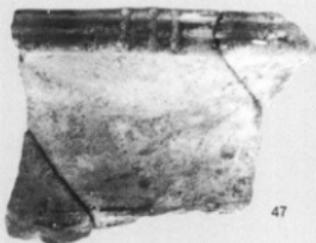
上塘 SK04 出土遺物 (1)



45



52



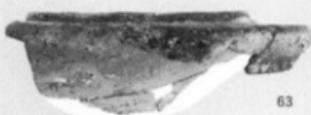
47



54



48



63



55

土堆 SK04 出土遺物 (2)

図版  
12



68



69

ピットP10出土遺物

写 真 図 版

II 矢野遺跡（市道改良工事）



調査地Ⅰ区遺溝検出状況

南より



調査地Ⅱ区遺溝検出状況

南より



調査地Ⅰ区土塙 SK01 遺物検出状況

南東より



調査地Ⅰ区土塙 SK01 遺物検出状況

北東より



調査地1区溝 SD01 遺物検出状況

南東より



調査地1区溝 SD01 遺物検出状況

北東より



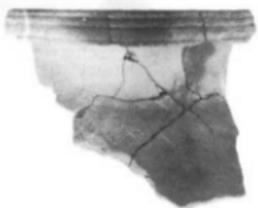
調査地Ⅲ区土壤 SK02 遺物検出状況

北東より



調査地Ⅲ区土壤 SK02 遺物検出状況

北西より



2



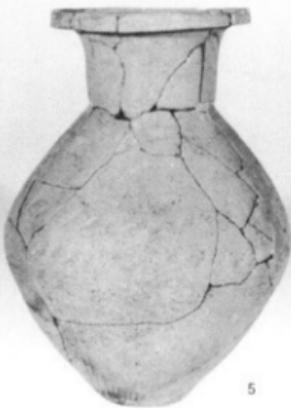
6



3



8



5



9

土壤 SK01 出土遺物



14



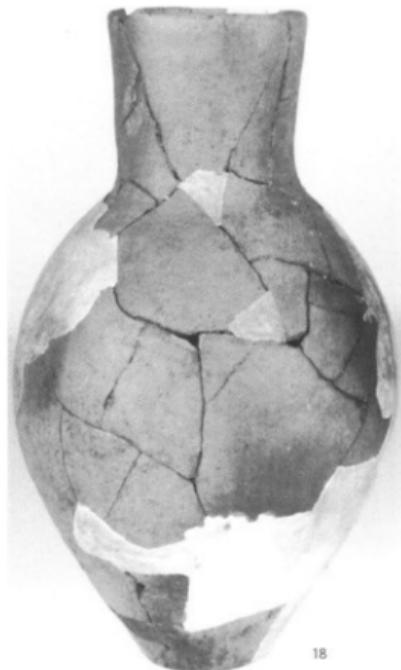
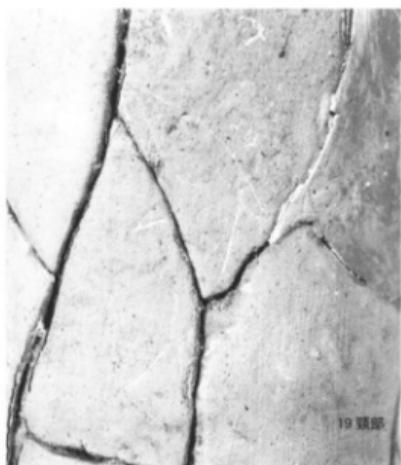
15



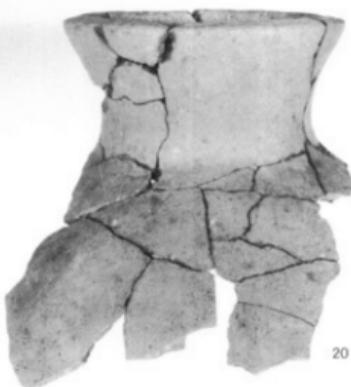
16



16



土壤 SK01 出土遺物



20



21

土城 SK01 出土遺物



26



34

土壤 SK01 出土遺物



29



37



43

土壤 SK01 出土遺物



44



51



46

溝 SD01 (44, 46) 土壙 SK02 (51) 出土遺物



48



49



52

写 真 図 版

III マンジョ塚 2 号墳（市道拡幅工事）



調査地遠景

西より



岩盤検出状況

北より

図  
版  
2



主体部埋葬施設蓋石の検出状況

南より



6



1



2



13



3



7



10



8



11



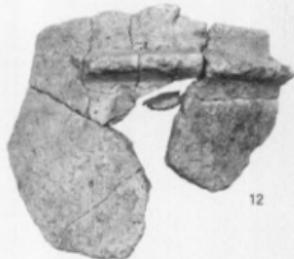
9



4



5



12

徳島市埋蔵文化財発掘調査概要 10

2000.3.31

編集 徳島市教育委員会社会教育課  
発行 徳島市教育委員会  
印刷 グランド印刷株式会社